

新撰國語讀本

昭和二年

卷七

375.9  
Daij  
資料室

41518

教科書文庫

4
86
41-1932
200030
1884

57

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

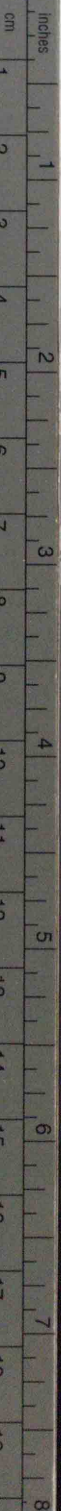


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

375,9  
Sa19

昭和七年二月十日  
文部省檢定  
中學國語教科用

# 新撰國語讀本

(昭和二版)

## 卷七

文學博士 佐々政一編

文學博士 武島又次郎  
菅川種郎補  
杉敏介



### 凡 例

- 一、本書一部十卷は故佐佐政一編新撰國語讀本を最近改正された中學校教授要目に準據して新に補修したものである。
- 一、本卷は第四學年の前期用たるべきもので、現代文近世文及び近古文を以て編成した。近古文の大體は前卷所收のものと相待つて窺ひ得られよう。
- 一、現代文を除く外は例によつて助動詞の「むを」に改めず、又第八章年年隨筆は學習上の一段として句讀點を施さなかつた。
- 一、所收の各篇は悉く著名の作品で、何れも文章の模範たるべきものである。但し或作品はその全文を掲げることが出来ないで、拔萃したのもあり、一部分を削除したのもある。又文字辭句も、普通教育上の見地から、多少原作と違へたところもある。此等は總てその篇の終りに「による」の三字を添へたが、その責任は勿論補修者の負ふべきものである。
- 一、作品の採録に就き快く承諾された各位に對して茲に敬意を表し、併せて種種の注意と助言とを與へられたことを感謝する。

目次

一 我等の覺悟……………田中寛一……………四

二 人生終に奈何……………高山樗牛……………一三

三 感想三篇……………一七

一、人間の價値……………和辻哲郎……………一七

二、人と石……………綱島梁川……………二三

三、小造化翁……………綱島梁川……………二四

四 言 語……………幸田露伴……………二五

五 煙霞療養……………尾崎紅葉……………二九

六 汽車に乗りて(詩)……………上田 敏……………三六

七 知己難……………徳富蘇峰……………四〇

八 年年隨筆……………石原正明……………四三

九 百蟲譜……………横井也有……………四九

一〇 擬古文二篇……………藤井高尙……………五五

一、夏 草……………清水濱臣……………五八

二、殘 暑……………

二 文盲は昔造の家藏……………上田秋成……………五

三 平家雜感……………高山樗牛……………六七

一、都 落……………六七

二、入道相國……………七〇

三 長柄堤の訣別(戯曲)……………坪内逍遙……………七五

近古文選

〇 謡曲と狂言……………佐成謙太郎……………八七

一 八 島(謡曲)……………(觀世流謡本)……………九五

二 末ひろがり(狂言)……………(狂言 記)……………一〇五

三 鎌倉三代……………(増 鏡)……………一二三

四 承久のみだれ……………(増 鏡)……………一二九

五 春のひかり(和歌)……………(新葉集)……………一三八

六 正成兄弟の討死……………(太平記)……………一三三

七 正行吉野へ參る……………(太平記)……………一三七

八 朝顔の露……………鴨 長明……………一四三

### 一 我等の覺悟

日本民族の前途は洋洋として希望に満ちてゐる。而も、この希望を實現するには、民族各員の思慮と努力とを要する。それは日本民族の大使命を自覺し、その達成に向つて精進することによつてのみ實現し得られる。

文明の進歩は諸民族間の交通を頻繁にし、個個人の相接する機會を多くするのみならず、印刷物などによる思想の傳播を容易ならしめる。その結果は、各民族とも、新しい習慣、思想、信仰、文藝に接觸する機會が多くなつて、在來の道德や思想などが威力を弱め、人人の行動がまちまちになりがちである。これは現代の諸民族が親しく經驗してゐる所であり、各國の指導者がその頭を悩ましてゐる



問題である。思想の混亂不統一も或場合には進歩の階梯とも見られるが、それが極端に走つて、一民族の傳統を破壊し去る時には、その民族は自滅の外はなくなる。吾吾が外國の文明に接觸する時に、最も心しなければならぬのはこの點である。即ち、傳統的な中心思想なり中心感情なりを失はないで、外來の思想なり感情なりは、總てこれを以て、わが傳統的なものに磨きをかけて、それを精練する材料とするといふ心掛が必要である。ここに少しく外來思想に對する態度に就て一言した。

由來、人には古い物を棄てて新しい物に就かうとする一面がある。この好奇心を満足せしめつつ、文化の發達に貢獻する意味で、新しい思想の研究をするのは悪いことではない。併し、どんな思想でも、その起るには相當の理由がある。かの勞農ロシアの過激思想の

隔

如きは、ロシアに於て始めて起るべきものである。即ち時勢を無視した専制政治に對する反抗心の發露である。又支那の一部に過激思想に共鳴する者のあるのは、彼等が元來利己的の民族であつて、國家或は民人の安寧幸福を眼中に置かない者が多いからである。總て如何なる事でも、新しいから善いとは言へない。之に反して、自國の歴史は尊い。蓋しその國の歴史は、その民族に適する思想の發現の跡であるからである。同様に、風俗習慣、道德宗教等も亦その民族に適するものの殘存したものである。この明かな事實を無視して、徒に新を追うて外國の眞似をするのは、極言すれば自殺的行爲である。曾て澤庵亡國論を唱へた人がある。その論によれば、澤庵の如き滋養分がなくて消化の悪い物を食べてゐれば、國が亡びるといふのであつた。然るに、最近の研究によれば、澤庵にはヴィタミ

例の如く  
明瞭  
明瞭  
明瞭

ンBが多量に含まれてゐるといふ。して見ると、前の論者も、徒に西洋かぶれをしないで、澤庵を長い間食べて來た日本人が、強健に壽命を保つて來たことを考へれば、あのやうな暴論は吐き得なかつたであらう。西洋崇拜家の議論には、大凡この類のものが多いた。ただ吾吾の反省しなればならないことは、風俗や習慣などの中には、その起る時には相當の理由があつても、時代の経過につれて、その理由は疾く消滅して、徒に形式だけのものが存續することがある。といふ事實である。かかる場合には、適當にこれを改良する必要がある。併し、どんなに些細な習慣でも、それを改變する時には、その結果としてどんな影響があるかを先づ考へなければならぬ。況や民族の中心思想に影響を及ぼす如き思想の研究者は、極めて慎重な態度を持してゐなければならぬ。

Mis 吾吾

從來、日本人が徒に外國人の行動を摸倣して得得としてゐたことは、<sup>不愉快</sup> 苦しいことであるが、それには大いに理由がある。その原因を探つて見るに、大凡二つある。その一つは西洋諸國との交通の開けた當時からの惰性であり、<sup>モラル</sup> 他の一つはわが國の文化に就ての深い研究がなかつたからである。西洋文明の特徴は主として自然科学の研究とその應用とにあつて、目前に容易に示されるものであるが、これは從來わが國に最も缺けてゐた點であつた。それ故に、西洋文明に始めて接觸した吾吾の先輩は、わが國の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。これは無理のないことである。しかも、その後自然科学の研究はその進歩に於て殆ど停止する所がなく、一步否數十歩も遅れてゐたわが國民は、ただ彼等のやつた跡に追隨して行くだけであつた。これが西洋崇拜の主なる原因で、

*mis best*

その崇拜の結果は、一も二もなく總て彼等の行動はよいものと考へ、それを摸倣することが一日遅るれば、それだけ時世に遅れるやうな感を抱き、茲に摸倣に對する競争といふ珍現象を引起したのである。<sup>感</sup> その當然の結果として、わが國の文化に特有なものがあるか否かをさへ顧みるものが少なくなり、誰も彼も自己を反省する邊を失つたのである。隨つてわが國の文化の精髓の如何といふことに就ては、まだ多くの人人はこれを知らなかつた。それは、一つは自然科学の研究をすることに較べると著しく困難なことであつたにもよるが、また一部の人人を除いては、これを探究しようとする心さへも起さなかつたからである。さうして、何時の間にか傳統的の中心思想をさへ失はうとしてゐたのである。併し、今や西洋文明の

本質もほぼ明かになり、また心ある人人は内に自ら省みて、わが民族特有の文化に就てこれを明かにしようとするやうになつた。將來は、一方には西洋文化もこれを研究しつつ、而もそれに捕はれず、他方にはわが固有の文化に就て一層深く探究し、その美點と缺點とを明かにし、東西兩文明の融合の上に立つ創造に向つて大いに努力しなければならぬ。大和民族の大使命を果さうとするには、この努力を惜しんではならぬ。これが吾々の努むべき第一の要點である。

抑、西洋文明は自然科学的或は物質的の文明と言はれるが、それは一般的のいひ現し方である。彼にあつても、吾々の大いに學ばなければならぬ多くの精神的訓練がある。殊に日常生活に於ける對人的道德、或は公衆道德に於て、吾々の以て師とすべきものが少

なくない。對人的道德の中でも、殊に信用を重んずること、時間を守ること、汽車や電車内に於ける作法等に於て、わが國民は遺憾ながら英國人などに劣つてゐるやうに思はれる。併し、わが國民が先天的に不正直であり、他人の迷惑を考へない民族であるのではない。これは、廣い範圍の社會生活にまだ慣れないのに因ることが多いのである。併し、かかる理由があるからと言つて、これを恕する譯には行かない。最高文明の建設に参加する者としては、此等の點に於ても亦優れてゐなければならぬ。これが注意すべき第二の要點である。

更に注意すべき重要なことは、科學の研究とその應用とに就てである。吾々は精神文化を高調するけれども、それと同時に科學の研究とその應用との重要なことも大いに認めるものである。元

ayu

先天的  
的  
的



田中寛一 倫理學者。文學博士。東京高等師範學校英文科・京都帝國大學文學部出身。現に東京文理科大学教授兼東京高等師範學校教授。

來、わが國には、外國にないやうな尊い文化があるのであるが、それだけでは優越民族にならない。その上に、科學的知識を利用して、生活の改善と能率の増進とを十分に計らなければ、到底今後の世界の舞臺に立つて優秀な他民族と伍して行くことは出来ない。殊にわが國の如くに、天産物に於て餘り恵まれてゐない國では、生産の人的要素たる科學的知識の應用を、一層進めなければならぬ。この點に就ては、わが國に於ても近來著しい進歩を見るに至つたのであるが、まだまだ十分とは言はれないのである。將來の大文明を荷ふためには、大和民族の大いに努力しなければならぬ多くの事項が、この外にもまだ數へ切れない位にあるであらうが、要は現實に即しつゝ、高遠の理想を目ざして何處までも進むより外に道はないのである。(田中寛一著「日本民族の將來」による)

## 二 人生終に奈何

人生終に奈何、これ實に一大疑問にあらずや。生きて回天の雄圖を成し、死して千歳の功名を垂る、人生之を以て盡きたりとすべきか。予甚だ之に惑ふ。生前一杯の酒を樂しむ、何ぞ須ひん身後千載の名、人は只行樂して已まんか。予甚だ之に惑ふ。蝸牛角上に何事かを争ふ、石火光中に此の身を寄す、人は只無常を悟つて終らんか。予甚だ之に惑ふ。吁、人生終に奈何。はた人は只死するが爲に生れたるか。嘗て一古寺に遊ぶ。檐朽ち柱傾き、破壁摧欄、僅に雨露を凌ぐ。環堵廓然として空宇人を絶ち、芒芒たる萋草晝猶暗く、古墳累累として其の間に横たはれるを見、猛然として悟り、喟然として嘆ず。吁、天下心を傷ましむる、斯くの如き物あるか。借問す、これ誰が家の墳ぞ。弔

\*蝸牛角上争何事、石火光中寄此身。(白樂天)

蝸牛角上争何事、石火光中寄此身。

祭永く至らず墓塔空しく雨露の爲に朽つ。想ふに、其の生れて世に在るや、冲天の雄志躍躍として禁ふる能はず、天下を擧げて之に與ふるも心慊焉たらざりし者も、一旦魂絶えて身異物となれば、墓塔墓陰盈尺の地を守つて寂然として聲なし。人生の空然たる、哀しむべきの至ならずや。後人碑を建て之に銘するは、其の心素より其の英名を不朽に傳へんとするにあり。然れども、星遷り、世變り、之が洒掃の勞を取るの人なく、雨雪之を碎き、風露之を破り、今や塊然として土芥に委するも、人絶えて之を顧みず、先人の功名得て而して傳ふべきなし。思一たび此に至れば、かの廣大なる墓碑を立てて名不朽を願ふ者は、何等の癡愚ぞや。嗚呼、劫火爛然として一たび輝けば、大千旦に壞す。天地又何の常か之あらん。想ふに、かの功業を竹帛に止めて盛名の無窮を望む者は、其の癡之に等しきを得んや。

悟れ、一瞬の須臾なるも、千歳の久しきも、天地の無窮なるに比すれば、等しくこれ一刹那なるにあらずや。名其の死と共に滅するも、死後千年を経て亡ぶるも、其の終あるに至りては一なり。人生を此の世に享け、此の一時の名を希ふ、五十年の目的、遂に之に過ぎざるか。予甚だ之に惑ふ。

功名朝露の如し、頼むべからず。人生終に奈何。藐然として流俗の毀譽に關せず、優游自適、其の好む所に從ふ、樂しきは即ち樂しみなりと雖も、蟪蛄草露に終ると孰れぞや。栖栖遑遑、時を匡し道に順ひ、仰いで鳳鳴を悲しみ、俯して匏瓜を嘆ず。之を估つて售れざらんことを恐れ、之を藏めて失はんことを憂ふ。これ正は即ち正なりと雖も、寧ろ鳥獸の營營として走生奔死するに等しきなきか。光を含み世に混じ、長統の跡を尋ね、劉子の流を汲み、濁醪一引、俯して萬物の

後漢の仲長統を指す。劉伶を指す。

夸父不量力、欲追日影、逐之於隅谷之際、渴欲得飲、赴飲河、渭、河渭不足、將走北、飲大澤、未至道渴而死。(列子) 莊子をいふ。 苦集滅道の四種をいふ。

高山樗牛 文學博士。名は林次郎。山形縣の人。東京帝國大學文學部出身。第二高等學校教授、後、博文館に入つた。明治三十五年歿、年三十二。

擾擾焉たるを望むは、快は即ち快なりと雖も、醉生夢死草木と何ぞ擇ばん、吁、人は空名の爲に生れたるか、はた行樂せんが爲に生れたるか、果して然らば、これ夸父日を追ふの癡を學ぶにあらざれば、禽獸草木と其の命を等しうせんとするものなり。予甚だ之に惑ふ。

南華老人は言へらく、大覺ありて其の大夢なるを知る。と。佛氏は諭すらく、離慾の寂靜は四諦を悟る所以なり。と。已めよ、若し人生を以て夢となさば、迷へるも悟れるも等しくこれ夢にあらざや。縦ひ身を觀じて岸頭籬根の草とし、命を論じて江邊不繫の船となすも、期する所は一の墓門にあらずや。生前の事業夢中の觀の如く、死後の名聞草露の如くんば、茫然たる吾が生、夫れ何處にか寄せん。大哀と謂はざるべけんや。嗚呼、人生終に奈何、予往を顧み來を慮り、半夜惘然として、われ我を喪ふ。(高山樗牛著、樗牛全集)

三 感想三篇

人生は戦一、人間の價値

人生は戦である。そして、戦の大小深淺がまた人間の價値を左右する。戦の態度の純一は、複雑な内生により、單純な迷のない生活に遙かに起り易い。それ故に、ただ純一の故に、意を安めてはいけない。純一の態度に固執する者は、ともすれば内容を空疎にする。

私は或冬の日、紺青鮮かな海の邊に立つた。帆を張つた二三十艘の小舟が、群をなして沖から歸つて來る。そして、鳩が地へ舞ひおりるやうに、徐徐に一艘づつ帆を卸して、半町程の沖合に屯した。岸との間には、大きい白い磯波が捲返してゐる。何時の間にか、薄穢ない老人と子供とが、岸邊に群がり立つた。やがて、體の好い若者の揃つ

\*Rhythm.  
韻律

た舟が最初に突進んで来る。磯波は烈しく押戻す。綱が投げられる。若者が波の間へ飛込んで行く。舟は木の葉のやうに揉まれてゐる。若者は舟の傍木へ肩を掛ける。陸からは、綱を引く者が諸聲に力のリズムを響かせる。かくて、波を蹴散らし、足を揃へ、聲を合せて、舟を砂の上に引きずり上げて行く。

一艘あがると共に、舟にゐた若者達は直に綱を取つて海に向つた。次の一艘が磯波に乗りかかると、ちやうど荒廻る鹿の角に綱を投掛けるやうに、若者は舟へ綱を投げる。そして、他の若者達は躍りかかつて、肩を當てて一氣に舟を引上げる。かうして、次から次へと數十艘の舟が陸へ上げられるのである。陸上の人數は益殖える。舟は益面白さうに上つて来る。老人と子供と女房達とは、綱に掴まつて快活に跳ねてゐる。誰が命令すると云ふでもないのに、一團の人

恍惚 集中 純一

人は、有機體のやうに、協力と分業とで仕事を完全に實現して行く。私は息を詰めてこの光景を見守つた。海の方と戦ふ人間の姿。集中と純一とが最も具體的な形に現れてゐる。力の充實、隙間のない活動。一人の少年が兩手を高く舉げて、波の中に躍り込んで行く。首だけ出して、波にさらはれた板切に追縋る。やがて、板切を抱いて、水を跳飛ばしながら駛上つて来る。生が躍り跳ねてゐる。生が自然と戦ひ、それを征服してゐる。

私は、そこに現れた集中と純一と全存在的な活動との故に、暫し恍惚とした。

この氣持の好さは、我我が凡ての活動に追求めて居る所の一種の法悦であつた。我我の内にも亦、生の焰はかく燃上らなくてはいけない。誠にそれは生本來の姿であり、また生本來の歡喜である。

(→)Lyeff Nikolaievich Tolstoi.  
(1828—1910)

ロシアの大文豪

(三)  
フランソワの彫刻家



トルストイ

かうして漁師の群の活動を眺めてゐる内に、私はふと傍觀者の手持無沙汰を感じ出した。私は漁師の群に投じて共に働くか、でなければ傍觀者としての自己の立場を是認するか、何れかに道を決めなければならなくなつた。そして私の頭には、百姓と共に枯草を刈るトルストイの面影と、地獄の扉を見下して坐すべきあの考へる人の姿とが、相並んで浮び出た。私は石の上に腰をおろして、左の肱を右の膝に突いて、顎を手の甲にのせて、——そして考に沈んだ。残つた舟はもう二三艘になつてゐた。

私は思つた。漁師の群に貴い集中と純一とを認めしたのは、私の心



考へる人(作ンダロ)

に過ぎなかつたではないか。彼等が濱から家へ歸ると、其處にはもう貴さはない。彼等は波と戦つて勇しく打克つ。併し、相手が人間になり、更に自分の心になると、彼等はもう立派な戦士ではない。彼等の活動は眞生の面影を暗示する。併し、それは彼等自身の生活ではなかつた。彼等は低い力と戦つてゐる時にのみ強いのであつた。

私は複雑な深さの知れぬ人生の色色な力を思つた。そして、集中と純一との缺けてゐるみじめな醜さを心に浮べた。其處にある苦しい戦は、裸になつて冬の海に飛込むことに依つては解決されさうにもなかつた。私はただ自

分のやり方で、自分の内生に、あの集中と純一とを獲得する外はない。そのためには私の凡ての戦を終局まで戦はなくてはならぬ。勝利を得るまでの分裂した生活のみじめさは、目下の自分の力では如何ともし難い。

私は一つの事を悟り得た。迷と屈託とに遲滯してある故を以て、直にその人の人格を卑しめてはいけない。態度の純一の故に、直にその人の人格を過大視してはいけない。態度の美しさの外になほ一つ、戦の深さによつて人を見る視點があるからである。

和辻哲郎 哲學者。東京帝國大學文學部出身。現に京都帝國大學助教。

(和辻哲郎著、偶像再興による)

### 二、人と石

路傍の頑石、若し一朝人語を發して、妙辭を吐囑し、法音を流宣することあらば、吾人は愕然として其處なる靈異の神にぬかづくべし。

ここに人の形したるものありて、語り、歌ひ、考へ、驚く。而して吾等はこれを平常當然の事象と見做して、曾て驚異せず、嗟歎せず。況や、其處に靈異の神の現前して、不斷（可憐な形をとりかへる）の法輪を轉じつつあるの一事に、想ひ到るが如きことをや、寧ろ大怪事と謂はざるべけんや。

石の形したるもの語り且つ考ふれば驚き怪しみ、而して人の形したるもの語り且つ考ふれば驚き怪しまず。その理由を問へば、ただ石は黙し人は語るて、ふ後天經驗の事象に見慣れ聞慣れて、敢てこれを不思議とせざる吾人習性の然らしむる所といふの外はあらず。甚しいかな、習性の人心を梗塞し壅閉することや。

それ神の前には人石となり、石人となる。神は能く石をして叫ばしめ、人をして黙せしむ。心靈の事實は一如洋洋として到る處に充ち盈てり。我等如何なれば、人の形したる物の語り且つ考ふるの事

象に執して、石の形したる物の語り且つ考ふるの合理に見到らざる。如何なれば、又石の形したる物の語り且つ考ふるの合理に驚異して、人の形したる物の語り且つ考ふる事象に驚異せざる。古人曰はずや、君子は理を見て形に局せず。と。かれ驚異すべくば、これ亦驚異すべく、これ合理ならば、かれ亦合理なり。かるが故に、達者は能く石女の舞ふを見、能く木人の歌ふを聞く。(綱島梁川著、梁川全集による)

三、小造化翁

一切の人に下るの大誠意、大愛心ありて、便ち一切の人を畏れざる大勇大剛を生じ來る。是の如き人は、不諍の地に遊び、無鬪の場に立ち、一切を支配する無冠の帝王なり。是の如き人は、その身邊一切の人を一團渾厚の和氣中に薰蒸し、陶鑄せでは已まざる。一個の小造化翁なり。(同上)

綱島梁川 哲學者。名は榮一郎。岡山縣の人。早稲田大學文學部出身。明治四十年歿。年三十五。

孟嘗君の故事  
支那の戰國の時の魏の人。連衡の策を立てて名を顯した。  
同じく戰國の時の洛陽の人。合従の策を唱へて名を掲げた。

孟嘗君の故事  
支那の戰國の時の魏の人。連衡の策を立てて名を顯した。  
同じく戰國の時の洛陽の人。合従の策を唱へて名を掲げた。

四言語

多く言ふことなかれ、汝が言と汝が心とこれ一ならば、汝終に舌頭に跳り舞ふ底の傀儡となるべし。汝が言と汝が心とこれ別ならば、汝が家裏の兒驕り母嗟するが如き惡光景、見るに堪へざらん。舌に従つて意動かば、芭蕉葉闊くして風にその幹を折らるる時あらん。意を奉じて舌ひるがへらば、雞鳴狗盜の客を用ふるもの、畢竟英雄にあらじと罵られん。多く言ふことなかれ、意を傳ふる、何ぞ必ずしも三寸の舌を須ひん。張儀の功を成せるは、巨口を張開して、わが舌なほ在りや。と言ひし處にあつて、秦王面前に唇動き舌鼓せるの時にあらず。蘇秦の功を成せるは、機杼の音を聞きて俯首一番せし

沈黙

處にあつて、趙王殿裏に疾呼し絮説せるの時にあらず。

沈黙は愚人の甲冑なり、奸者の城塞なり。明白白の心地温煦煦の胸郭ならば、千言萬語するとも何の不可かあらん。債鬼を怖るるものは門を閉づる堅く、醜婦を蓄ふるものは窓を開くを忌む。

大丈夫坐すれば須く孤峯の雲に聳ゆるが如くなるべし。臥さば須く長江の野に横たはるが如くなるべし。語は雷の鳴るが如く、黙は水の凍るが如くなるべし。

敗將は兵を談ぜず、良賈は深く藏す。言多き者は卑しとせられ、語少なき者は憚らる。言を以て招くは、無言を以て招くに如かず。語を以て斥くるは、無言を以て斥くるに如かず。桃李抑、何を言ひて下自ら蹊を成せるや。宗廟抑、何を語つて人敢て瀆さざるや。言を放つ、固より舌を抜かるるを辭せず。人を辱る、何ぞ身を失ふ

范蠡曰、臣聞亡國之臣、不敢語政、敗軍之將、不敢語勇。  
(吳越春秋)  
桃李不<sub>レ</sub>言<sub>下</sub>自成<sub>レ</sub>蹊<sub>(諺)</sub>

支那古代の天子。盤古氏夫婦陰陽之始也。(述異記)

盤古氏夫婦陰陽之始也。(述異記)  
支那古代の天子。  
泥枝相摩

を惜しまん。物を愛すれば、錢を費し、酒を喫すれば、胃を害ふ。加減乗除し去るに、三も無し、四も無く、六も空しく、七も空し。好快活、風蒼穹を渡り、濤大洋に騒ぐといへども、空に纖塵をも増さず、水に一滴をも減ぜず。汝語り、汝黙す、依然としてこれ汝。われ語り、われ黙す、依然としてこれ我。火は潤さず、水は焚かず。盤古氏以來人間奇事なし。汝詐らずば、語も亦好し、黙も亦好し。われ欺くべくば、語も亦非、黙も亦非ならん。

無禮なる朋友は無用の長物なり。人多ければ事敗れ、樹多ければ果小なり。人益多ければ語語相反して怒を生じ、互に傷つく。樹愈多ければ枝枝相摩して火を發して、共に焚く。故に樹を栽うる度あり、人を待つ禮あり。樹を栽うるは接近に過ぐるを忌み、人を待つは狎昵に過ぐるを嫌ふ。接するものは伐るべし、狎るるものは遠ざくべ



子曰、君子、喻於義、小人、喻於利。

(論語)

幸田露伴 文學博士。小説家。名は成行。嘗て京都帝國大學講師たり、現に帝國學士院會員。

し。樹は光を樹より奪ひ、人は生を人より偷む。ただ度あり禮あらば、互に相長じ、互に相助くるに足る。言は禮の形なきなり、禮は言の形あるなり。言にして禮に違はば殆いか。  
言ふ能はざるを言ひ、成す能はざるを成さんとするもの、これ大味者、これ大仁者、これ大癡者、これ大勇者、これ大愚者、これ大智者なり。憐むべし、千古の好漢、ただ大味、大癡、大愚たらざらんことを懼るのみ。何の暇あつてか、語黙の間の小損小益を計較するを事とせんや。

得んと欲するは失はざらんと欲するに如かずと、これ愚説なり。命を捨てずんば何ぞ命を得んや。得失利害の説遂に明らめ難し。この故に勇士は得失を言はず、君子は義を取つて利を計らず。

(幸田露伴著「長語」による)

新潟縣直江津町。

同縣中頸城郡一本木新田の赤倉温泉場の旅館。筆者は二日間そこに泊つて、今朝立つて来たのである。  
涼風のわが眉太し 佐渡ヶ島 (尾崎紅葉)

### 五 煙霞療養

九時三十分(三)に此處を發車して、忽ち眼明かなりと驚けば、渺渺たる日本海は折しも波(波)に一船(船)を著けず、雲に一鳥(鳥)を帯びずして、千萬頃(所)の虚しく闊きに、ただ池(池)の如き潮の浩蕩として遊ぶのであつた。と見るに、琉璃の烟るやうに物ありて、ほのかに顯るるを、早くも、佐渡佐渡」と案内する聲がした。まことに香嶽樓の縁端に伸上つて、わが眉太し」とこの美人を天の一方(方)に望んだ佐渡ヶ島は、今日を遮るものもあらぬ三十海里の波上に、温泉水滑洗凝脂とやうに浮び出たのである。  
美なるかな、この島の風情。凡そ眺めてかくも懐しく、又譬へん方なく心動かさるる遠景色は、これを他に求めて己はありとも覺え

ぬ直江津の古い「鹽たれ唄」とかいふのに、

佐渡へ佐渡へと草木も靡く

佐渡は居よいか住みよいか

とあるのを見ても、この景に對して心を動かさざる者はないと知れる。殊に「居よいか住みよいか」と疑つた處に言はれぬ妙があるの  
で、この唄の精神もただ其の九字に存すれば、又この景に人の恍惚  
たるのも、頗る其の九字の感に堪へぬのである。又かの「來いとゆた  
とて行かりよか」の如きは、苟も日本語を解する者にして知らざる  
はなきまでに轟いてゐる。其處が古の配處であつたとも知らず、今  
も小判になる物が出ると知らぬ輩でも、波の上の行かれぬ處とい  
ふことは皆心得てゐる。それほどの口吟を思はずに誰一人ここが  
過ぎらるるであらう。

〔二〕  
俚諺の一節で、「佐渡へ、佐渡は四十九里波の上」と續くのである。

〔三〕  
石川縣鳳至郡にまゐる町の名。

〔四〕  
佐渡に於ける最も大きな町の名。

〔五〕  
石川縣珠洲郡に屬し、能登半島の最北端をなす岬。

〔六〕  
「東京日日新聞」の創始者。また眼藥「精銚水」の販賣を以ても名高かつた。明治三十八年歿、年七十三。

遙かに佐渡が見ゆる、四十九里と直に胸に浮ぶ、それにしては近いやうだといふ疑が又起るのである。能登の輪島から四十九里といふ説があつて、とにかく越後の唄ではないに極つてゐる。佐渡の相川の人の談に、極極快晴の日、所謂日本晴には、能登の珠洲崎が雲烟縹渺として、見えると謂へば見えるくらゐに見える。その人は一年の中に唯一度見たといふ。そこで「來いとゆた」とて行かりよかの首を搔いて遠人を憶ふ、惘悵無限の意が殊に深い。この「來いとゆたとて」に就て思ひ出したのは、過ぐる年、富小路侍従の行くを送つて

岸田吟香翁の歌がある、なかなか面白い。

大君のみことかしこみ來いとゆたとて行かりよかといふ

佐渡へ行く君

己も亦一句なかるべけんやと、

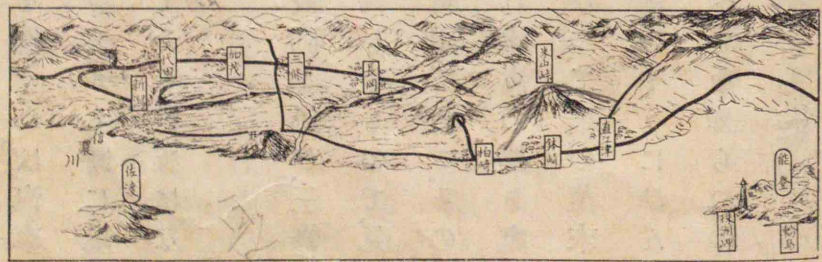
(一) 新潟縣中頸城郡米山村に屬する字。この名の一驛がある。  
(二) 同縣刈羽郡に屬する町の名で、また鐵道の一驛である。  
(三) 静岡縣庵原郡に屬する地名。

佛 輝 邊  
祖 連 摩

抑、この海の雄渾と併せてこの島の秀麗を見るのは、北越鐵道線双快の一で、他は更に進んで鉢崎から柏崎に抵るまで米山峠の眞下を磯傳ひに疾驅しつつ、八門のトンネルを出入するのである。その趣は稍東海道線の薩埵峠を過ぐるに髣髴たるのであるが、これは皮相の似たるばかりで、彼に在つては全く此の氣魄を虧く。道は荒浪の磯邊であるから、一面巖石突兀として、或は潮に臥し、或は草に躡まり、或は山に逆らつて峙ち、或は水に臨んで仆るといふ有様。さて其の大きいなるものに在つては、百歩にして崖と壅がり、二百歩にして岩鼻と突出るのを、總てトンネルに貫いて、佛に逢へば佛を殺し、祖に逢へば祖を殺し、道に當る者あれば必ず突いて進むのである。

(四) 群馬縣碓氷郡と長野縣北佐久郡との境にある山。

トンネル續きの線路は碓氷であれ、箱根であれ、皆理の同じからぬはないが、別して此處に其の想があるのは、長江透迤として六枚屏風の將に疊まぬずる如き曲折を盡すが故に、甲のトンネルを出づれば直に乙のトンネルの全景が見える、乙を過ぐれば丙、丙が去れば丁と、彼等は争つて五月蠅なすのが一一目に入る。譬へば己大剛の者にして、群がる敵を物の數ともせず、當るを幸、一太刀づつ片端から撫斬にして通るも斯くやと覺ゆるやうにて、而も處は弓手に方りて日本海、逃るる路も荒磯の浪檣、駭と寄せては返す鬨の聲、馬手には峻嶺、峨峨として、當國無双の名も高き米山峠は聳えたり、



コニ  
弓手(在)  
長江(石)  
掛  
懸  
魚  
蝦

と思へば、殆ど快極まつて肉躍るのであつた。此處を過ぐれば、汽車を嫌ふ者も汽車に在るのを忘れ、喜ばしからぬトンネルも時に取つての興となつて、なかなか神経などを衰弱させてゐる段ではなかつた。

柏崎を踰ゆれば線路は次第に海に遠ざかつて長岡を過ぎ、三條に入らば、この邊からかけて、加茂、矢代田の水害は甚しきもので、見ゆる限は村もなく、小屋もなく、平一面の漠漠たる青田である。その七分を領して氾濫する水は縦横に川を畫いて流れ、水嵩の厚き處は湖の狀をなして、漾漾波を弄んでゐる。水漬しになつて稻の葉末の小指ほども出てゐる處を見れば、水さへ退けば舊のやうにびんとなるのであらうと、ただ水の勢を見て、害の恐るべきを知らぬのであつたが、その水の退いた跡を過ぎて見ると、慄然とした。

新潟縣の中央部に  
ある市の名。  
共に同縣南蒲原郡  
に屬する町の名。  
同縣中蒲原郡小須  
戸町の一字。

接頭語  
みり野

沼垂の訛。今は新潟市の一部。

明治維新の初に開港場として開放した五つの港。横濱、神戸、長崎、新潟、函館。  
若狭・越前・加賀能登・越中・越後・佐渡。

尾崎紅葉 小説家。名は徳太郎。東京の人。明治三十六年歿、年三十七。

苗は悉く根を抜いてぶつ倒れたのを、又この上から踏んづけ散らしたやうに、百方狼藉を極めた體たらくは、とても米の生る木と見る影はない。

水害の跡弔ふ田唄作らせよ

まどろむむかと思へばのつたりと呼び起されて、ここで下りると慌てて停車場を出れば、三時十分。さて此處に八千八川の水を取つて一條の流に打成すと聞ゆる信濃川を帯びて、日本五港の一なる繁華と、北陸七ヶ國の大都會たる殷富とを左右にせる新潟市は、始めて己の眼に映るのであつた。が頗る不足を感じた。今己は車を驅つて其の繁華の都會に入らんとするに際して、必ず爾あるべき意氣の盛んなるものが絶えてなくして、心の底には冷やかなものが觸れてゐたのである。(尾崎紅葉著「紅葉全集」による)

六 汽車に乗りて

赤松の林をあとに  
麻畠ひだりに見つつ  
汽車はいま堤にかかる  
ほのかなる水のほひに  
河淀の近きはしるし

三稜草生ふる河原に  
葦切はけけしとさわぎ  
鶺鴒こそ夏は來らね  
たまたまに百舌の速賢

篋鷺の何をか思ふ  
しよんぼりと立てる暇に

紡績の宿にやあらん  
きりはたりはたりちやうちやう

箴の音ややに隔たり

道祖神まわるあたりの

鐵道の踏切近く

繩帶のつづれの衣

かち色は飾磨の染の

乳呑子を負へる少女は

淺茅生のすぐるに立ちて

萬歳とはやし送りぬ

十んぼりの暇

擬聲語

4月 島日鳥連  
[Seal]

御

萬歳は汝にこそあれ  
 幾とせを生きよ里の子  
 人の世に尊きものは  
 土の香ぞ國の御魂ぞ  
 いつはりの市に住まへば  
 産土の神にさかりて  
 やしなひを缺きたる人も  
 埴安の里の土より  
 生えぬきの汝に呼ばれて  
 本然の命にかへる  
 道芝の上吹く風よ  
 農人の寝ざめに通ふ

産土  
市

也

上田敏 文學博士。東京の人。東京帝國大學文學部出身。東京高等師範學校教授。京都帝國大學教授。大正五年歿。年四十三。

微かなる土のおとづれ  
 なつかしき母の聲音か  
 晝さがり草の香たかく  
 松脂のほひもまじる  
 地の胸の乳房のかをり  
 蘇門答刺の香も及ばじ  
 鳴神の落ちかかるごと  
 汽車はいま橋に轟く  
 柀がまへ目路をかざりて  
 ひとり見る蛇籠の礫  
 見る蛇籠の路を

鳴神たちまちに鐵の匂す  
 汽車はいま橋に轟く  
 柀がまへ目路をかざりて  
 ひとり見る蛇籠の礫  
 見る蛇籠の路を

上田敏著 上田敏詩集

七 知己難

魏の名將、司馬懿。  
(八三—八二)  
支那甘肅省鞏昌府。  
蜀の丞相、諸葛亮。  
(八四—八五)  
蜀の烈帝、劉相。  
(八三—八二)

朋友にして知己ならざるものあり、知己にして朋友ならざるものあり、否、知己は敵人の間にもこれあるべきなり。かの仲達が祁山渭水の空營を按じて、天下の奇才なり。と叫びたるを見れば、かの孔明のためには好き知己なりしにあらざるや。孔明は實に二個の知己を持てり、敵にては仲達、身方にては玄德。

人は何人とも朋友となるを得べし。情と情と相接する日は即ち朋友の出で来る時なり。觸るれば情を生じ、著すれば情を生じ、久しければ情を生じ、しばしばすれば情を生じ、竹馬の友、同窓の友、同郷の友、同業の友、同位置の友、同臭味の友、友もまた類多し。然り、天下何人か友ならざるものあらん、少しく心をとめて談話すれば、東京よ

り横濱に至るまでの電車中にてすら、幾多の友人は得らるるにあらずや。

知己に至りては然らず。天下千百の朋友を得るは易けれども、一人の知己を得るは難し。知己とは何ぞ。我よりすれば彼に知らるるなり。彼よりすれば我知るなり。

君ならでたれにか見せむ梅のはな色をも香をも知る人ぞ知る

これ實に知己に對する情なり。かかる知己を一人にても有すればまだしも、世には一人の知己をも有せざるもの多し。而して何人も知己を欲せざるは無し。故に一の知己を得れば、殆ど一の生命を得たるよりも嬉しく、一の知己を失へば、一の生命を失ひしよりも

悲し。鐘子期死して伯牙絃を絶ち、荊軻死して高漸離また筑を撃た

湘雲 伯一

古今集にある紀友則の歌。

王那

湘雲

支那戰國時代初期の人。  
支那戰國時代末期の人。

中唐の詩人。

楊巨源

蘇軾。東坡はその字。(一六六—一七六)蘇轍。子由はその字。(一六九—一七七)

ず。その心まことに憐むべきものあり。  
楊巨源の詩にいはく、詩家清景在新春。柳嫩鶯黃色未勻。若待上林花似錦。出門皆是看花人。と龍を見て龍となす、難きにあらず。一寸の蛇を見て早くもその雲を起し、霧を吐き、茫洋として玄間を窮め、日月に薄るを知る、これ難きなり。知己の難きは、その未だ發達せざる時に於て、他日の發達を卜することの難きにあり。その見たる嘻笑怒罵の外に、隠れたる胸間の神祕を會得することの難きにあり。人はその半身上は祕密なり。知己はよく鍵なくして此の祕密を知る。もとより他の我に向ひて語るを待たざるなり。語るを待ちて之を知るが如き、これ豈に知己ならんや。  
知己の感は兄弟の間にもあり。東坡曾て獄に投ぜられて、重辟に處せられんとするを聞き、その弟子由に書を贈りていはく、是處青

慕慕慕

前漢の賈誼。(四六—一四九)戰國時代の楚の人。名は平。文章家。(一五五) Cicero。(B.C.106—43)ローマの政治家、哲學者。 Scipio。(B.C.185?—129)ローマの名將。

山可埋骨。他年夜雨獨傷神。與君世世爲兄弟。又結來生未了因。と。その同胞の情、もとより篤し。況や、これに重ねるに雙雙知己の恩愛を以てするに於てをや。死後なほ兄弟となり、その未了因を繋がんといふ。世の兄弟にして斯くの如き知己の感あるもの、古往今來それいくばくぞ。  
知己は敵人の間にあるのみならず、生面の人にもあり、或は古人に對してもあり。知己の交感は時を問はず、處を論ぜず。賈生が屈原を慕ひ、孟軻が孔子を慕ひ、而して孔子が周公を慕ひて、甚しいかな。吾が衰へや、久しいかな、吾また夢に周公を見ず。といひしが如き、その言の濃到深切、感ずべきにあらずや。キケロ曰く、余に對しては、スキピオなほ生けるなり。而して以て常に生くべし。と。嗚呼、宇宙茫茫、ただ知己ありて以て繋ぐところあり。知己なくば人生は荒野のみ、



荆棘のみ。

\*唐の人。太宗の朝に待中であつた。(CHAO-I-MON)

徳富蘇峯 名は猪一郎。同志社出身。もと國民新聞社長。現に貴族院議員・帝國學士院會員・大阪毎日新聞社實。

人は知己のためにその憂苦患難を共にするを厭はず甚しきは其の一身を投じて知己のために犠牲となるものあり。彼等は漫りに犠牲となるにあらず、實に知己のために犠牲となるなり。苟も一の知己を得る、生命を捨つるも悔いず。況や區區たる浮世の名利をや、魏徵が「人生感意氣、功名誰復論」といへる句は、實に人の深奥なる思想を吐露したるものなり。

人生の最も清福なるは知己を持てるにあり。朋友中に知己を持てるは最も清福なり、而してその兄弟姉妹、父母の中に知己を持てるは、最も大いなる清福なり。かの東坡子由の如く、風雨の夜、兄弟床を並べて千古の懷を敘するを得ば、天下また之に優る清福なからん。(徳富蘇峯)

八年年隨筆

隨筆は見聞く事いひ思ふ事あだ事もまめ事も寄りくるに隨ひて書きつくるものにしあれば常にはいとよく知りをする事も忘れては僻事いひ淺まなる考どもも立ちまじり文章も艶にこまかにふとえ書きとらでこちごちしく拙き事などもありてさまあしき物ながらさるつくろひなきものなるゆる心意氣才のほど器のかざりも見えてなかなか面白きものなり

\*\*\*

市の中は何事も目とまる事なけれどただ雪の朝こそめづらしうをかしけれすべて何處も雪はけしき殊に處かはりたる心地してめづらしうをかし日のさしのぼるほど皆起出で往來さがしき



残りなく散るぞめでたき櫻花ありて世の中はてのうければ「古今集」詠人不知

公治は姓、長は名、孔子の弟子。皇侃の撰した「論語義疏」の中に、「公治長從衛還魯、行至二國界上、聞鳥相呼、往清溪、食死人肉」云云とあり、又宋之問の詩や白樂天の禽蟲詩序などに治長の鳥語に通じてゐたことを記してゐる。

石原正明 國學者。尾張の人。本居宣長・堀保己一に學ぶ。文政四年(西)歿年六十二。

散るぞめでたきと詠みしも理なり櫻の盛りは只二日三日ばかり餘りあへなき心地はすれど又來む春はと心いられして待たるも久しからぬ故ぞかし唐桐といふもの葉のさま涼しげに花の色いとめでたけれど夏の半ばより秋過ぐるまで只同じさまに咲きたるに飽きはてて疾く枯れよかしとさへぞ思はるるや

\*\*\*

鳥獸は鳴く聲に遲速緩急大小高低ありて喜怒哀樂の勢を寫すなるが**つ**ぶ**つ**ぶと物語するばかり下の情の通ずるものなりおのがどち通ふ詞ありて鳴き**つ**つ物語するにはあらず鹿雉などの笛に寄るにてしるし笛の音に詞あるべきにはあらねど遲速緩急大小高低を寫すゆる鳥獸も然ぞと思ひて寄るなり公治長が鳥語に通じたりといふ説は由なき事なり (石原正明著「年隨筆」による)

九百蟲譜

若し鳴かば蝶蝶籠の苦を受けむ (西山宗因)  
昔者莊周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也。俄然覺、周蓬蓬然。周也。不知周之夢爲胡蝶、歟。胡蝶之夢爲周歟。 (莊子)

阿呆の鼻毛で蜻蛉つなぐ。(俚諺)  
似我蜂のこと。  
狂蜂穿溜蜜。(杜市)

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物の限なるべし。それも啼く音の愛なければ籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢もこの物には託しけめただ蜻蛉のみこそ彼にはやや並ぶらめど、絲につながれ、繭にさされて、童のもてあそびとなるだに苦しきを、阿呆の鼻毛に繋がるるとは、いと口惜しき諺かな。美人の眉に譬へたる蛾といふ蟲もあるものを。

子を持てるものは、その恩愛に引かされてこそ苦勞はすれ。蜂の他の蟲をとりて我が子となす、老の行くへをかからむともあらず、何を譲らむとてかくは骨折るや。我に似よ似よとは、如何に己が身を思ひあがれるにかあらむ。花に狂ずるとは詩人の稱にして、歌

〔古今和歌集〕平安朝時代に出来た歌集で、敍撰和歌集の最初のものである。

〔古今集序〕花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生ける物いづれか歌をよまざりける。

〔松尾芭蕉〕

やがて死ぬ氣色は見えず蟬のころ

〔松尾芭蕉〕  
〔晉書〕  
胤恭勤不倦、博學多通。家貧、不常得油、夏月則練囊盛數十螢火、以照書、以夜繼日焉。

にはさしも詠まず、蜜をこぼして世のためとするはよし。ただ人目稀なる薬師堂に大きな巢作りて、掃除坊主をおびやかさむとす。それも針なくば人には憎まれじを。

蛙は「古今」の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。臘月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、このものの事、更にも誇り難し。

蟬はただ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やや日ざかりに啼きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば、初蝶とも初蛙ともいふ事を聞かず、このものばかり初蟬といはるこそ大きな手柄なれ。やがて死ぬ氣色は見えずと、このものの上は翁の一句に盡きたりと云ふべし。

螢は比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草

〔時鳥の異名〕

わがせこが来べき青なりささかへの蜘蛛の振舞かねてしるしも 〔古今集〕衣通姫

楚國製合初隨楚

王朝、宿未央宮、

見蜘蛛大如粟、

四面紫羅網、有

魚網之而死、合

乃歎曰、吾生亦如

此耳、仕官者人之

羅網也、豈可淹

歲、於是挂冠而

退、時人謂之爲

蜘蛛之隱。

〔金樓子〕

源氏、驍勇、射能

くし、土蜘蛛を退

治した事を以て古

來有名である。

にすだく五月の闇はただこの物のためにやとまでぞ覺ゆる。然るに、貧の學者に捕られて、油火の代りにせられたるは、この物の本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは、殊の外の不自由なり。俳諧にはこの眞似すべからず。

茅蜩は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕べは草に露おく頃ならむ、つくつくぼうしといふ蟬は、筑紫戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して此のものになりたりと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蜘蛛は巧に網を結んで、ひそまつて物を害せむとす。待つ暮の歌に詠まれ、又は退隱の媒ともなりたれど、偏に奸賊の心ありて、いと憎し。古代朝敵の始として、頼光をさへ脅かしたる、いと恐し。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるは、些かあはれ添

ふる折もあらむか。彼はかひがひしく巢作りてこそあれ、東海道に散りぼひたる宿なし者をば、くもとはいかでいふやらむ。  
 芋蟲は腹立つものに譬へ、毛蟲はむつかしき親仁の號とす。弱蟲、吝蟲は名のみして蟲ならず。油蟲といふは、蟲にありて憎まれず、人にありて嫌はる。

蠶の生涯は世の爲に終り、火取蟲は誰がために身をこがすや。蜉蝣ははかなきためしに引かれ、蓼くふ蟲は不物好の謗となれり。さは俳諧するものを、俳諧せぬ人のかくいふ折もあるべし。  
 おなじ賣の名によばれて、玉蟲は優しく黄金蟲は卑し。

蟻は明けくれにいそがしく、世の營に隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めて止まず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるも、たより悪しき方に穴を營みて、千丈の堤を崩

淳子<sup>(一)</sup>、夢入<sup>ヒテニリ</sup>大槐安國<sup>見ル</sup>、王<sup>ヲ</sup>曰、吾南柯郡<sup>シテ</sup>、屈<sup>レ</sup>卿爲<sup>レ</sup>守<sup>ル</sup>。居<sup>ル</sup>凡<sup>ソ</sup>二十載<sup>ニ</sup>。使者<sup>ヲ</sup>送<sup>リ</sup>出<sup>ス</sup>、穴<sup>ヲ</sup>遂<sup>ニ</sup>塞<sup>ル</sup>。尋<sup>ニ</sup>古槐<sup>ノ</sup>下<sup>ニ</sup>蟻<sup>ノ</sup>穴<sup>ヲ</sup>、洞然<sup>ト</sup>明<sup>ル</sup>。乃<sup>チ</sup>槐安國<sup>ト</sup>。又一穴<sup>ナリ</sup>、直上<sup>ニ</sup>南枝<sup>ニ</sup>、即南柯郡也<sup>ト</sup>。(異聞集)  
 千丈之堤<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>蟻<sup>ノ</sup>蟻之穴<sup>ヲ</sup>潰<sup>ル</sup>。  
 (韓非子)

すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子に憐まる。狗の齒に噛まるる。蚤は偶にして、猿の手に探らるる虱は遁ること難かるべし。蝸牛はただ水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらむ。家は持ちたれども、行くさきざきを負ひ歩くは、水雲の安きにも似ず。

蛇蚯蚓の足なくともあるべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用のことなり。

蠅螂の瘦せたるも斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこの類はあるべし。

蟹のあゆみに譬ふべきものこそなければ、ただ原吉原を駕籠に乗りて富士を眺めゆく人には似たり。

機織・鈴蟲・轡蟲は、その音の似たるを以て名に呼べり。松蟲のその

(三) 「憎着蠅賦」を指していふ。  
 (四) 「憐紙魚詞」を指していふ。

(五) 欲<sup>ス</sup>以<sup>テ</sup>蠅螂<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>斧<sup>ヲ</sup>、禦<sup>ル</sup>隆車<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>隣<sup>ニ</sup>。(文選)

(六) 静岡縣駿東郡にある地名。  
 (七) 同縣富士郡にある地名。

雲水  
 行脚  
 アニキナ

秋風に結びぬらし  
藤袴つづりさせて  
ふ蟋蟀なく(古今  
集)在原棟梁)

あまの刈る藻にす  
む蟲のわれからと  
音をこそなかめ世  
をば恨みじ(古今  
集)藤原直子)

蓑蟲……八月ばか  
りになれば、父よ  
父よとはかなげに  
鳴く。(枕草子)

晉の嵇康・阮籍・山  
濤・向秀・劉伶・阮  
咸・王戎の七人を  
竹林七賢といふ。

横井有也 俳人。  
名は時蛟。尾張  
侯の重臣。詩文  
をよくした。  
天明三年(四四)  
歿、年八十二。

木にも寄らで、いかでかく名を付けたるならむ。毛生ひ、むくつけき  
蟲にも同じ名ありて、松を枯らし、人に疎まる。一つ在處に二人の八  
兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす、これ松蟲の類  
なるべし。

きりぎりすのつづりさせとは、人の爲に夜寒を教へ、藻に棲む蟲  
はわれからと、ただ身の上を歎くらむを、蓑蟲は父のみ戀ひて、など  
かは母を慕はざるらむ。

蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕べ、は  
じめてほのかに聞きたらむ、又は長月の頃、力なく残りたるは、寂し  
きかたもあり、蚊帳つりたる家のさま、蚊遣焚く里の煙など、かつは  
風雅の道具ともなれり、藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄に  
は、いかに團扇の隙なかりけむ。(横井也有著、獨衣による)

第三馬場

陳書 年十  
五、嘗聞處一室、  
而庭宇蕪穢、父友  
薛勤來候之、謂  
之曰、孺子何不  
洒掃以待賓客。蓋  
曰、大丈夫處世、當  
掃除天下、安事一  
室乎。勤知其  
有清世志、甚奇  
之。(後漢書)陳  
蕃傳)

庭のおもても見えぬばかりに殊更に草を茂らせて、人のあやし  
み咎めたるに、ますらをの心は天の下を拂はむとこそ思へ。とかし  
こげに矜りてうちいひたるは、にくき唐人のさかしら心にぞあり  
ける。茂りたるはいと物むづかしければ、ときどき拂ふこそよけれ  
されど、五月雨の頃はえしも拂ひあへずかし、霽れま霽れまに庭に  
出でて、ふぐしだつ物して短きをも掘りて籠に入れて、童して捨て  
させなどするを、はてはは物うがりて、あくびうちして、やうなき  
事し給ふものかな。あすあさての程にはまたものごと茂りぬべ  
し。といひて、むづかしげに思ひたる氣色なるもいとほしくて、拂ひ

一〇 擬古文二篇

一、夏草

藤井高尙 國學者。備中吉備津宮の祠官。本居宣長の門下。天保十二年(一八四一)歿。

させばげに一日二日の程にまたいみじう茂りて、まだきに秋の野のやうになむなりぬる。よし今は拂はで、この草むらを秋まつ蟲のすみかにせむと思へば、童がいさめも嬉しうなむ。

(藤井高尙著、松屋文集による)

二、残暑

山田の錦江亭につどひて歌よみけると、とき残暑といふことを題にて作れる辭。

土さへ裂くる心地したる程は、ことわりの暑さに思ひなして、さまでも覚えざりしを、御禊川に流しやりつるやうに思ひすてたる夏のなごり、又も立返りて、昨日今日となりてはなかなか堪へ難く覺ゆるよ、怪しくさるべき事どもこそあらね。さるは庭のさまを見るにも、しなえよらるるばかりの日影ともなく、袖吹く風も身に

清水濱臣 國學者。泊酒舎と號した。江戸の人。村田春海の門下。文政七年(一八二四)歿。年四十九。

しみそめぬるに、いかなればかく覺ゆるにはあらむ。思ふに心のたゆみにこそはありけれ。心のたゆみばかり口惜しきものは、あらじ。よろづまなびの道もしかこそはあれ。うひまなびの程は、いかでと思ふ心のすすみより、よひあかつきに勉め勵みて、文机に向ひても、春の日を短う、秋の夜を長からぬやうにのみ覺ゆるを、いささか物の心しり得て後は、いとなく怠りゆくならひより、ふみを開きては見るに物うく、筆をとりにては書くに心つかれて、はてはては文机の上につぶしかかるめり。いと口惜しき事ならずや。残る暑さの堪へ難きはかくていつまでかはあらむ。心たゆみもさてあるべし。まなびの道の怠りは、年毎にいとどしくなりまさりなむと思ふからに、我と心に誠めまほしくこそ。(清水濱臣著、遊京漫録による)

第二卷 試論 四條

① フカス

一一 文盲は昔造の家藏

北濱の米問屋に、大豆屋七兵衛とて家造も昔もの的高等親父家内二十人暮しにて降つても照つても年分に千兩づつは延びて行



く鼻毛のあまり、ひとり息子七三郎は甘茶育ちにて、釋迦でも食はぬいさすぎ者。一度聞いた事はちんぷんかんでも遁さねば、耳塚と異名をつ

けて、息子中での憎み者なり。親七兵衛は根から土人形にて、世間に何がはやらうとも、江戸合羽の煙草入に茶紬の置頭巾にて、店から臺所のきまりを心がけ、芝居遊山は身がなまけると嫌ひ、茶の湯は溢うて吞まれぬと、一俵十

大阪市東區にある町名。江戸時代には米市場があつた處。今も株式取引所がある。

生気な人。用語のむつかしくて、わけの分らぬこと。

世間知らずの律儀者。

吝嗇家。禪宗の二派、曹洞宗と臨濟宗。

「碧巖錄」「臨濟錄」の類。禪家に於て悟道の書を集録したるもの。

はぐまの毛を束ねて、柄を附けたもので、蚊蠅などを拂ふために僧の用ひるもの。

共に「如何」「どうか」の意で、禪家にて用ひる語。

禪家で學徒を警醒するに用ひる棒。俗刑の筭に似てゐる。

禪家で、何かの事故のために、參禪又は念誦を休止すること。

二匁の丹波茶に、吉野榧の菓子にて尻のつまりし身持。朝鮮人を三度見たよりは咄のない男ぞかし。かほどの老武者、根城もよく持固めたれば、最早七十に近きとて隱居の望、法體して名を大愚と改められ、七三郎は七郎右衛門と呼ばれて、わが代知りたる顔に、専ら禪學に誇り、洞濟二派の語録に眼を留むるより、自然と心高ぶり、米市場に拂子を振立てて、乍麼生か千俵賣らう。什麼三千買はう。などと、え知らぬ言葉を使ひ、丁稚少婦が茶碗一つ破りしをも、喝と叫んで三十棒を打ちけるにぞ、半季きはめの奉公人は中戸の客板を打つて、放參放參と暇をとりにつけり。つき合ひが擴がるにつけて、近頃は雪の朝茶、春の夜咄と、頗りに古い物好きになりて、生きた萬寶全書とそやされて、目利がること凄じ。上町邊の書物屋菊亭といふ發明者、門口にはひらぬ程な掛物

一一 文盲は昔造の家藏

天



支那の三國の代に起つた國。恰もわが神功皇后の攝政の御代に相當し、紀元九二五年に、五代四十六年で晉に亡ぼされた。明帝はその第二代の王であつた。

字は仲將。京兆の人。大字を善くした。生歿年未詳。

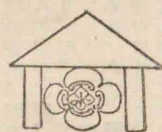
屏風や襖や額などに貼つてあつたのを剝がし取つた書畫。

唐の高祖が國を建てたのは、わが推古天皇の二十五年(二七)で、以來凡そ三百年、わが醍醐天皇の延喜七年(二五七)哀帝に至つて亡びた。

箱を持つて來て、且那、この間は御見舞申しませぬ。この横物は唐筆でござりますが、けしからぬ見事に見えますけれど、名印がない故、誰ぢややら知れませぬ。」と出して見すれば、七郎右衛門一目見るよりせせら笑ひ、そちもこのやうな古筆を商なほうと思はば、ちと心懸けたがよい。これは魏の明帝の築かれし凌雲臺の額ぢや。この樓を築く時、過ちて額を釘にて打著けた故、文字を書くに、韋誕といふ能書を轆轤にて釣上げて書かせられたが、地より高き事二十五丈ありし由、韋誕恐れて白髪となつたとあるが、その額のまくりと見える。魏と唐とは、唐は餘程後ぢやのに、唐筆とは書林に言ふまじき文盲。」と叱られて、「これはしたり、根から存じませぬ。あなたにお目にかけたればこそ、きつと解りました。これは魏といふ國の人の書いたのでござりますか。私は魏筆と言ふは贗物の事と存じて居りました。

(五) 手数料。

(六) 左圖の如き紋所。



(七) 刀の柄の目釘に差込む金具。  
(八) 「甚しく」の意。

た。左様なら古い物でござります。お目利の上なれば、よいやうに買うて下さりませ。」と言ふにぞ、いかさま、この文字の震うた處が面白い。おれが決めて、安うも買はれまい。金子二十兩に買うて遣らう。」と言はるるに、菊亭、それでは口錢がござりませぬと、且那に見て貰ひまして、高うも申されまい。」と置いて去ぬ。

跡へ一丁目筋の刀屋が、且那、あなたでなければ知れぬ物が出ました。」と、朱鞘の合口を出して、「これに庵に木瓜の目貫がかけてござります。この紋所は曾我兄弟のかと存じます。めつたに古う見えますれば、若し昔の曾我殿の持たれた物ではあるまいか、御覽じて下さりませ。」と差出すを、七郎右衛門取つてつくづく見て、「これを曾我兄弟が所持とまでは氣がついても、どういふ譯といふ事は、お前の目には及ぶまい。これこそ曾我の時宗が箱王丸の昔箱根の別當

刀(二)に添へてさす短  
徹底(三)の意の俗語。  
金持(三)。有福な人。  
狩野氏(四)。織田・豊臣  
時代の畫家。天正  
十八年(三五〇)歿、  
年四十八。  
後藤氏(五)。金工。豊  
臣秀吉に仕へた。  
寛永八年(三九二)  
歿、年八十二。  
瀧本坊昭乗(六)。瀧本  
流の書を能くし、  
世に松花堂と呼ば  
れた。又狩野樂山  
などについて畫を  
學び、一家をなし  
た。寛永十六年(三  
九八)歿、年五十六。  
金襴(七)の一種。  
唐の玄宗の寵妃。  
藤原氏(九)。歌人。仁  
治二年(二〇二)歿、

の許にて敵工藤左衛門に始めて對面せし時、祐經より箱王に遣はせし、赤木の柄(つか)の差添(さ)ぢや、身も格別にはないが、出處が面白い。銀二十枚なら置いて去にや」と言はるるに、さてもさても、學問知らぬ者は、曾我とまでは氣がついても、根拔(ねぬ)が致(いた)しませぬ故、旦那に二十枚で掘出された」と、銀受取つて歸りぬ。とかく道具屋で知れぬ物は、この先生に持つて來て、目利して買うて貰ふとは商人の軍法、大豆屋の城を賣落さんとぞ謀りける。

或時、伏見町加賀屋何某が方にて道具會ありて、諸方の腹脹(はらふくれ)ども打寄つて、倦いた道具は持つて出で、珍しき物をとかかりけり。永徳の三幅對、徳乗(とく)が縁頭(ゆかり)、瀧本の自畫贊、淺黄印金(しん)が一尺四方、高麗茶碗、楊貴妃(よう)が天冠、定家卿(さだ)の鼻鑷(はな)まで、それぞれに糶(せり)分けて、市大ときにはずみけり。かかる中に六十有餘の落著きし人柄の老人、私もちと拂

年八十。

ひたい物がござる。」と、二重切の花活(しゅ)に朱棗器(なつめ)一つ出されければ、何れも見て廻し、まづ花活は銀五兩に納まり、茶器は銀二兩より糶りけるに、いやいや、それは餘りなり。」と引込めらるれば、段段糶上げて、金百疋につけければ、なんと御隱居、もうよい値段でござりますが、お放しなされませぬか。」と問へば、いやいや、お目に入らねば是非なし。手前料簡とは餘程相違いたす。」と取合はねば、はてなあ、見た處がさして名物とも見えぬ、少少(せうせう)なれも見ゆれば、よい拂値段であらうに。」と言へど、ただ默然と、返事せられず。

大豆屋七郎右衛門、床脇より遙かに、御隱居、お道具今一度お見せなされ。」と道具屋に取次がせ、暫く眺め入つて、これはちと存じ寄りあれば、私が申し請けませう。御不足ながら金子八十兩に負けて下されまいか。」と言へば、その時老人手を打つて、さても、さても、こなた

「手ずれ」品物の古び」などをいふ。

極めて高價な、何物にも代へ難い寶玉。「史記」に、趙の惠王が和氏の璧を得て秘藏してゐたのを、秦の昭王がその十五城を提供してこれに代へようとしたことが記してある。  
足利六代の將軍義政。

様はお若い、が、道具をお好きなさると見えて、天晴のお目利。八十兩では賣損がまゐれど、かう並んでござる道具屋衆も、金百疋相應と仰せられた物を、飛んで大金にお付けなされるは、この道具の素性御覽なされての事なれば、負けて進ませう。と言はるるに、一座大きに興を醒まし、これは何うした名物。と、明いた口塞がらねば、七郎右衛門したり顔にて、如何さま、千兩道具を小金に負けて下さるは、甚だ身にとつて大慶にこそござれ。連城の壁も、見る者がござらいでは、瓦礫も同然。これは東山殿の御重寶曙といふ茶器でござりますか。と存ずる。ちと見處あつて申す事ぢやが、左様でござりますか。と言へば、如何にも曙の名器でござる。とて、七重の服紗、十重の箱を取寄せたるに、満座の道具屋も素人衆も、これはと驚き、もみ手にて、七郎右衛門様お目利の名物、今一度拜見いたし申したし。と懐

ここでは鹽瀬製の茶椀紗をいふ。

から、嗜たしなみの鹽瀬取出すやら、手水つかひに立つやら、手に取つて見れば見る程、めつたにしほらしく見え、少しのなれと言ひしまで、ここが何うも言はれぬ處と、寄りこぞりて譽めそやすに、老人重ねて、お素人方はともあれ、歴歴の道具屋衆がござるが、いづれもの目利で求めさつしやる衆が、大阪中には數多ござらうが、今夕の體では、一向目の明いた衆は一人も見えませぬ。向後は七郎右衛門殿をお頼み申して、道具の素性も見習はつしやるが、貴様方の家業といふものぢや。と、飽くまで悪口せられても、一言の返答する者なく、一座し

らけて、その夜の會は果て、皆面目を失ひ歸りけり。  
これよりも、この沙汰が廣くなりて、京堺にも聞えければ、さる御大家も聞及ばれ、その曙の茶器は、故ありて先祖より此方の家に所持するところ、又又この度賣物に出でたりとは、その意を得ず。併し、

書畫刀劍などの眞偽良否を鑑定することを掌るもの。

何れが眞偽とも定め難ければとて、大豆屋へ使者を立てられ、目利所を以て改めさせられしに、並べては若干の違にて、御傳來も確に極め、數札の證據もあれば、大豆屋の茶器は丸薬入にも劣りて見ゆるにぞ、又この噂が廣くなりて、目利が違ひしとて、七郎右衛門が異名を目違先生と言ひはやしぬ。

隱居大愚この様子を聞及ばれ、大きに腹立し、七郎右衛門を呼びつけ、いらざる目利自慢より大分の金銀を費すのみか、人に笑はれて大恥の名を取りしこともと商人の道を忘れたるよりの事なり。町人は算筆とて、外の事はきつと嗜みて、家業を勉め、無用の目利致すべからず」と、席を打つて叱りつけ、隱居へ歸られぬ。七郎右衛門あを見送り、手鼓の中音にて、卑しき海士の胎内に宿りてと謠はれしは、いかい白癡の。(上田秋成著「諸道聽耳世間猿」による)

論曲「海士」の中にある句。

上田秋成 江戸時代の小説家。國學者。大阪の人。文化七年(一八七〇)歿、年七十八。

壽永二年(八四三)七月。

治承四年(八三〇)二月、平重衡、奈良を攻めて東大寺等を燒く。

養和元年(八四三)三月、平知盛等、源氏を美濃の墨股川に破る。

壽永二年七月、木曾義仲、叡山に據る。

み吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時の隠れがにせむ(古今集)

平清盛の邸。平頼盛の家。治承の頃は高倉上皇の御所であつた。

### 二二 平家雜感

#### 一、都 落

凡そ人國の傳へ遺しし史は多かれど、平家の都落ばかりあはれの極みにも亦目ざましき限なるはあらじ。平城の餘燼未だ冷めず、墨股の勝鬨なほ響きぬるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎はや比叡の前後に充ち満ちぬ。宇治淀の備へ脆くも潰えて、都も今を限とぞ見えし。あはれ、一門の天下身を置くに處なし。世はかく憂きを、み吉野の山のあなたにも隠れがは無きか。いざさらば已みなん。都の中に如何にもならんよりは、西國の行幸に御供して一旦の凌辱を忍ばまし。生死もわかぬこの別れ路、また歸り來べき都としも思はねばにや。六波羅池殿西八條以下一門譜第の邸宅宿房京白川

安徳

ふる郷を焼野のはらとかへり見て末も煙の波路をぞ行く(平經盛)

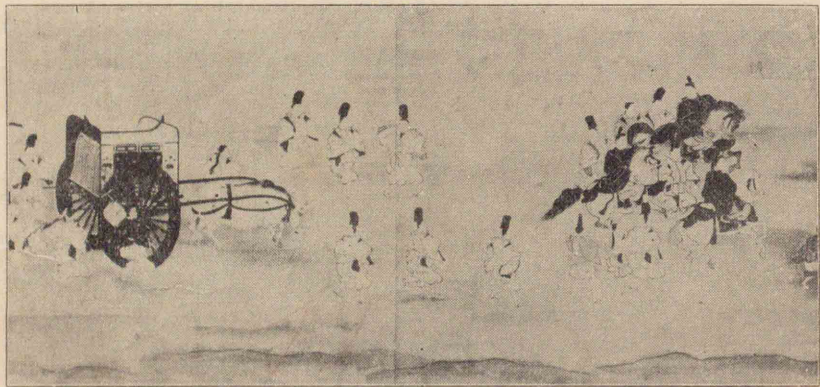


平家の都落

の四五萬家を併せて、一炬の煙となし果てぬることあわただしかりしか。ここに鳳闕の礎空しく残り、椒房のあらし夜夜悲しむ。保元この方、天下の榮華を盡したる花の都の故郷を、焼野の原と顧みて、末も煙の波路をば、行くへも知らずさすらふらん。直衣束帶の身にも、今は黒金の衣を著けたれども、詠歎の餘哀に狂れて、誰か弓矢の響を勵むべき。さても捨てたがき命や。今こそは世にも人にも憂かりけれ。流石に偲ばるる昔の様の夢に入るをば如何にせん。翠華搖搖として

らよむ  
行しりも

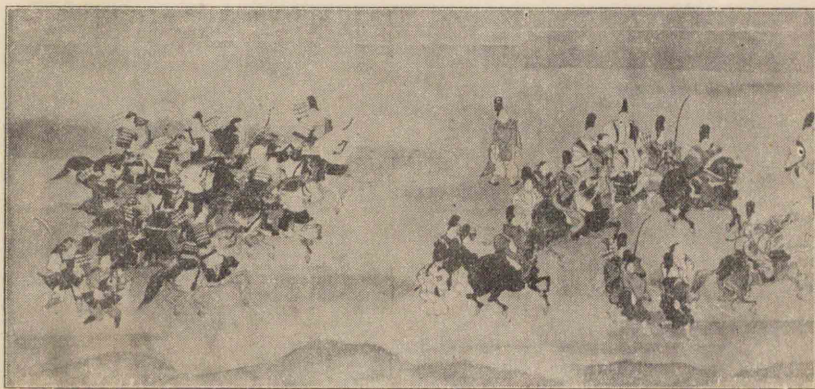
平重盛の第三子清經は、壽永二年十月、月夜に笛を吹いて、身を海に投じた。



高階隆兼筆

西に向へば、秋風到る處の野に充てり。あ昨日は東關の下に轡を並べし十萬餘騎、今日は西海の波に纜を解きて七千餘人行く。ての空は分かねども、身に沁む秋は欺かれず、渚に寄する波の音、袖に宿る月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出るさの山の端を、都の空とや思ひけん、日暮舷に笛吹く人あり、響は遠く煙波をかすめて、三軍ひとしく耳を敲つ。嗚呼、この時、この人、おもひ果して如何。古より亂離の世には反覆の人あるを免れず、安きを求め危きを避くるは已み

平頼盛を指す。清盛の異母弟。母は池の尼。壽永二年權大納言に拜せられ、その居を池殿と稱したので、世に池大納言といふ。平家都落の際一旦都を離れたが、鳥羽から再び京都に歸り、身をかくしてゐた。壽永三年五月源頼朝に迎へられて鎌倉に行き、翌月歸京。文治元年剃髮して名を重運と改めたが、翌二年(八四)歿、年五十五。



難き人の情なればなり。さもあれ、一の池殿の大納言が舊恩を頼みとして兵衛佐が芳心を望みしを外にして、平家の一門は、上は大臣納言より、下は衛府諸司の掾に至るまで、共共に没落の運命を同じうせしこそゆゆしけれ。  
げに名門の最後はかくてこそあるべかりけれ。凡そ邦家の滅亡必ずしも美しからず。ただ平家の没落に至りては何物の美かよくこれに類ふべき。

二、入道相國

世にもあはれなるは平家とぞ言ふめ

位加三在也  
入道し

woyhadny

朝櫻集  
十前集

平家  
源氏

忠度のこと。

維盛のこと。

平清盛。

攝政

る。まことに、この一門の盛衰を考ふれば、心も言葉もなかなかに及ばざりけり。案ずれば、一旦の榮華に耽りて百年の謀を思はず、秋や嵐の吹荒ばんずる朝、なほ春の夜の夢朧にして、覺めての後はさすがに憂き世と觀ずれども、先世後代既に梭を更へたるを如何にすべき。今を昔に還さんすべもかた絲の、より纏れたる世こそ返す返すも是非なけれ。されば、風雅に隠れては一題の遺詠に今生の本懐を終へ、恩愛に絆されては己身の現在に來世の果報を思はず、あはれは桐の一葉に散りそめて、世はとこしへの秋とぞ見えにける。思へば、奇しきまでにあはれなりける運命かな。

さるにても、入道相國の生涯こそなかなかに面白かりけれ。弓矢の勳はや畢んぬ。朝家の權柄今を盛りなり。一門殿上に昇りて六十餘人、私封全國に亙りて三十餘州、攝籙の家は名のみにて、四海の成

京師長吏、爲之側目。(陳鴻、長恨歌傳)  
内大臣源通親。

治承三年、後白河法皇を鳥羽殿に幽し奉る。  
治承四年、福原に遷都。

子曰、飯疏食、飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中。不義而富且貴、於我如浮雲。(論語) 穀山と奈良。

敗皆ここに集まり、昔は殿上の交をだに嫌はれし人、今はこの人ならでは人にあらじと唱へられ、二百の禿童は路に往反すれども、京師の長吏これが爲に目を側むるばかりなり。何某の卿が入る日も招き返さん勢」と書かれしも、げにことわりと覺ゆ。

不敵なる入道は、私門の榮華に飽足らで、世に人なきやうに振舞はれけるこそゆゆしけれ。ここに卿相雲客流離の難に逢ふもの四十餘人、法皇の御身を以てすら、城南の離宮に射山の嵐をしのばせ給ひぬ。中にも、重代の帝座俄に動きて、愛宕の里のあはれを留めけるこそ、なかなか淺ましかりしか。さはれ、不義の富貴は浮べる雲に等しかりき。一朝、東關急を傳へてより、西風漸く競はず、加ふるに北國にはかに雲亂れて、木曾の山氣やうやく都に逼り、兩山の衆徒また既に反覆の色を示しぬ。平家の運命、日に益、急なり。

myo

治承四年六月、後白河法皇を福原に幽閉し、十一月六波羅に遷し奉る。内大臣平重盛、小松殿と稱した。眼耳鼻舌身意の六根の慾。

時しも入道病に罹りぬ。げに怪しき病なりしかば、生死の境旦夕に逼りきとぞ覺えし。あはれ病の床の寂しきに、安藝守の昔より、太政入道の今に至るまで、六十四年の生涯を靜かに憶ひ出でん時、而して命の際の身ぞと觀ぜん時、彼果して如何の感慨をか催しけん。一代の榮華身に餘りて、幾度か帝座を驚かし奉り、はては軍兵を擁して法皇を幽閉し奉りしことの、非道の行爲なりしとは思はざりしか。更に小松の内府が身命に代へて、乃父の罪業を救はんとせし至孝の情に想ひ到りて、恩愛の絆に悔恨の心を動かすことなかりしか。假に佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六慾煩惱の絆を離れんずる大事の際に、今生の名利を捨てて、未來の淨樂を欣求するの一念を發することなかりしか。否否、あらず、入道は死に至るまで、その初念を翻すことあらざりき。彼は正にその生ける如く

にして死したりき。

兵衛佐頼朝が首を見ざりつるこそ、何よりも本意なけれ。われ如何にもなりなん後、佛事孝養をもすべからず、堂塔をも建つべからず。急ぎ討手を下し、頼朝が首を刎ねてわが墓の前に懸くべし。これぞ今生後世の孝養にてあらんぞ。彼の遺言は斯くなりき。三世の因果を身に引くとも、なほ怨敵に報いん事を必せり。げに恐しき執著にこそありけれ。飽くまで我意を徹し、道に背きて心に疾しからず。善惡一我の擇ぶにまかせて、毫末も悔ゆる所なし。天も落ちよ、地も裂けよ。四海の波を翻して彼が頭にかくとも、猶この一我を如何ともするなし。六尺の砂軀、ここに至れば天地の大にも較ぶべく、運命我に於て浮塵に等し。所謂死して而して生くるもの。入道こそは、まことに古今の大丈夫にてありけれ。(高山樗牛著「樗牛全集」による)

高山樗牛 文學博士。名は林次郎。山形縣の人。東京帝國大學文學部出身。第二高等學校教授。後、博文館に入社。明治三十六年歿、年三十二

因果  
三世

11 12 13 14 15

2時  
11日

大阪市東淀川區を流れてゐる長柄川の堤。長柄川は一名中津川といひ、淀川の一支流である。  
豊臣氏の臣。攝津茨木二萬五千石を領してゐた。  
今の大阪府三島郡茨木町。

### 一三 長柄堤の訣別

晨雞再び鳴いて殘月薄く、征馬頻りに嘶いて行人出づ。はや分れゆく横雲の、殘の星を一つづつ、鐘が消し行くいなめの、長柄堤に秋たけて、一むら蘆に風黒く、有明凄き大川水逝きて歸らぬ浪の音、狭霧に咽び白けゆく、千草が蔭の蟲の聲、哀はいとどまさるらん。片桐市正且元は居城茨木へ立退かんと、従ふ郎黨一百餘人、深更に邸を立つて、大阪城をあとにし、列を正してしづしづと、長柄堤にさしかかる。(中略)  
後には何か一思案、寂然として駒たつる長柄堤の、有明がた、時に囁る小鳥の聲、川霧やうやう霽れゆけば、遠樹模糊として幹を分ち、仄見え渡る賤が屋に、一筋のぼる朝煙、くだかけの聲、勇しく、生氣溢るる東の、空には似ぬや入り方の、月すさまじき柳蔭、枯葉枝まばらにして、風飄飄、見る目も昏し、遠方に、臙臙と現るる名におほ阪の四衢八街、悄然として寂しげに、一棟高く聳えしは、



如月之恆、如日之升、如南山之壽、不驚不崩。(詩經)  
豊臣秀吉をさす。  
清正、慶長十六年(三七)歿、年五十。  
秀吉の正妻。

須彌山

徳川秀忠の長女。慶長八年七月秀頼に嫁した。

片「おお、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと、築かせられし大阪城、故殿下かくれさせ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離ればなれ、取分け加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附黨同して相鬩げば、大政所の御方さへ、當家を餘處に見そなはし、浮世はなれし御ありさま、唇齒已に亡ぶ。今にもあれ事起らば、金城湯池もその甲斐なく、……」  
いひかけて、聲くもらせ。

片「須彌より重き御遺命、夢いささかも忘れざれど、御運の末か情なや。この且元がすることなすこと、いすかの嘴とくひちがひ、兩家を繋ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の導火となり、毘盧舎那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか、お家とこしなへに

京都大佛殿の鐘の銘に「國家安康」の文字があつて、家康から難題を持たれた。

康かれと、祝ひし文字が元となり、降つて沸いたる難題は、只前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり、かかる仕宜となつたること、御運の末とは言ひながら、……」  
こらへず馬より飛下り、かなたに向ひ平伏なし。

片「これしかじながら、不肖且元、愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の良にかかり、仰せつけられし御遺命に、背き奉る今日の仕合せ、不忠とも、いふかひなしとも、思し召さん。それを思へば某が、この腸はちぎるるばかり、償ひ難き不臣の罪は、あの世で御わび仕らん。お許しなされて下さりませ。」

「いますぐ如く兩手をつき、人目なければややし、不覺の涙に暮れけるが、ややあつて心付き、

片「ああ、我ながら不覺の至。わが大罪の御わびよりも、さしかかるお

家の安危長門守には如何にせし心許なき事どもぢやなあ。

すかし眺むる折こそあれ遙かに聞ゆる蹄の音程もあらせす只一騎殘霧つんざき一散に汗馬に宙を走り來る木村長門守重成

木「市正殿に候な。」

片「長門殿待ちかねしぞ。」

いふ間に駈寄るくつわづら右手におり立ち顔見合せ言葉はなくてそぞろにもまづ袖ぬるる朝露や風飄飄たる枯柳の枝入り方の月ゆらめきて老いゆく秋の寂しさを長柄堤にとどむらん。

木「もはや豊臣の御社稷もいよいよ末となつたるか棟梁と頼む足下まで佞人讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け空しく退身せらるるとはそれがし圖らぬ事よりして端なくも御母公の御嫌疑被り出仕を遠慮のその間に思ひがけぬ珍變ありつづいて足下に

秀頼の生母淀君。

織田信雄常眞入道。

大野治長。渡邊純。

御討手と昨朝承り大いに驚きすぐにお表へ參入すれば城内議論沸くが如く織田入道殿日頃に似氣なく激論の末席を蹴たて只今退座ありしとばかり後は亂脈無法の評定御母公の威を笠に被る大野渡邊等が我意暴慢この上は是非に及ばず彼等を一刀に斬つて捨て腹かつ切らんと二度まで刀の柄に手はかけしが貴殿が日頃の教訓を思ひ出して無念を忍び冤を知つて忠臣を救ひ得ざりしいふかひなさ。

悔むを且元おし宥め。

片「いしくも堪忍せられしぞやかねても屢申せし如くお家の大仇は彼等にあらす鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の所爲にあらじ某とてもこの度の一條遺恨骨に徹すと雖も今更繰返すは愚癡の至大切なるはお家の後事それがし退去のこと關東に聞えな

秀頼の好臣

ば、破綻生ぜんこと治定なるに、きのふまでは去就を定めざりし織田殿已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた、大亂破裂せんは目前なり。この上は只ひとへに、籠城の計畫こそ肝要なれ。」

木「して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。」

片「されば、今御城に兵糧金銀は乏しからず。まつた猛將勇卒にも事缺かねど、得難きは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備をなし置きたり。」

木「してその智謀の將とは。」

片「今九度山＊に隠れ忍ぶ信州上田前さきの城主、眞田安房守が二男、左衛門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ、智勇兼備の良軍師。關ヶ原の一戦以來、關東の跋扈を怒り、螫して世の様を窺へるを、先年お身方

＊和歌山縣伊都郡高野山の北谷にある地名。

となし置いたり。事起らば上使を以て、急ぎ彼を招かるべし。合戦の進退は、一切かの人に任せられよ。その他、關ヶ原の一亂以後、浪なせし長曾我部盛親、まつた黒田家の浪人後藤又兵衛基次、何れも得易からぬ良將なるが、豫て因ちかみはつけ置きたり。上御使を以て招かせられなば、心を傾け馳せ參ぜん。これ第一の手配なり。」

木「して又籠城となつたる曉敵を防がん手配は。」

片「その儀もかねて地利を考へ、出丸なくては叶ふまじと、前年紀州の山山より、材木あまた伐りいださせ、商業の爲と偽り、紀州川の川上より、浪速津に押流させ、御船入りに積み置いたり。まつた港口の御庫には、年ごろ力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に亙るといふとも、なほ支ふるに餘あるべし。」

木「それに加へて故殿下が、貯へ置かれし數萬の金銀、近年御出費か

さむと雖も、なほ若干の餘財あり。

片「甲冑兵具も乏しからず。」

木「城は名に負ふ南山不落。」

片「眞田後藤の智勇をもつて、この堅城に立て籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護する時んば、」

木「たとへ關東の老奸雄、利をくらはせ、諸大名をなつけ、六十餘州の兵を盡し、四方八方より攻寄すとも。」

片「なかなか三年四年が程には、攻落さんこと難かるべし。」

木「まつた若年には候へども、いよいよ軍はじまりなば、我また一方を承り、速水御宿和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の吹籬さん白旗は、祖先佐佐木が四目結ひ、君臣將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石も亦徹りぬべし。利慾に

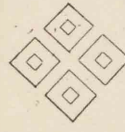
徳川家康を指す。

速水守久。

御宿正倫。

和久宗是。

左圖の如き紋所。



集まる關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰に従ひ、このこと君に言上なし、直に軍の手配せん。御心安かれ市正殿。

片「ほほ頼もし、頼もし。只只大切なるは上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とは言ひながら、往時に照らし、成りゆく末をかんがみれば、」

木「淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大野渡邊。」

片「上御發明にわたらせらるれど、」

木「讒佞これを蔽ふが故、」

片「地の利はあれども人の和なく、」

木「故太閤が御威武に、戦き震ひ打伏しし、六十餘州の民草も、」

片「天の時にや大御所の、自らなる徳風に、何時しか靡く世の有様。」

木「如何なればかくまでに、御運傾く西天の、」

片「有明の影うすれつつ、」

木「東天紅と八面に喧しく鳴くくだけけは、」

片「新日東天に昇るといふ、」

木「世の成行の、」

二人「影なるか。」

是非もなき世の有様と、入る方の月眺め入り、暫しは愚癡にをちかた寺、  
耳驚かす鐘の聲、夜は仄仄と明けにけり。市正おもてを正し、

片「萬一にもその期に至り、百計合期せずばそれまでなり。當來を誰  
かは知らん。瘧れて後已まんのみ。大丈夫豈に徒に杞憂すべしや。  
後事を足下に託せし上は、もはや思ひ残す事もなし。」

木「して足下にはこれよりして、」

片「居城茨木へ一先づ立越え、」

木「と言はるるは受取り難し。若しもやこれが今世の、」

△△  
hiroshiro

片「ああいや、潔き最期をだに遂ぐべき機會を失ひし、市正が命の拙  
さ、御詫の名こそ立ため、償ひ難き身の大罪、この身一つを兎や角  
と、千筋に迷ふ心の内、いやなに心ばかりは此の後とても、君の御  
影に附添ひ参らせ、萬一にも杞憂的中なし、大事去りなん其の時  
には、」

木「某とても事破れて、御運の末となる時は、この世の思ひ出、奉公納  
め、關東勢が真中に、縦横無盡の血戦なし、花花しく討死なさん。」

片「おお勇し、潔し。某長らへ世にあらば、その目覺しき働をば、餘處な  
がら見物なさん。なほ再會は黄泉にて、まづそれまでは長門殿、」

木「さやうござらば市正殿、」

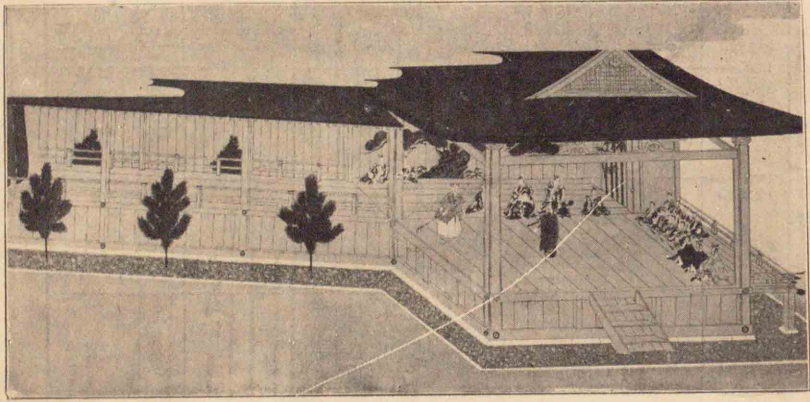
片「随分堅固で、」

木「足下にも。」

大野治長の家來。

名は十兵衛。片桐且元の家來。  
名は三右衛門。片桐且元の家來。

坪内逍遙 文學博士。名は雄藏。東京帝國大學文學部出身。長く早稻田大學教授であつた。現に同大學名譽教授。



(筆郎坦見深) 景全臺舞能

# 近古文選

惜しきが中の生別離、誠や之に比ぶれば、藁は蜜にや似たるらん。右と左に立別れ、駒引寄せて式退や、悵然たる重成が、乗移りざま振返る。堤下に一本くねり松怪しの人影すは曲者と、見る間も疾しや打出す手裏劍、あつとたまぎる聲諸共、覘ひは外れし種が鳥どうと大地に白倉源六、

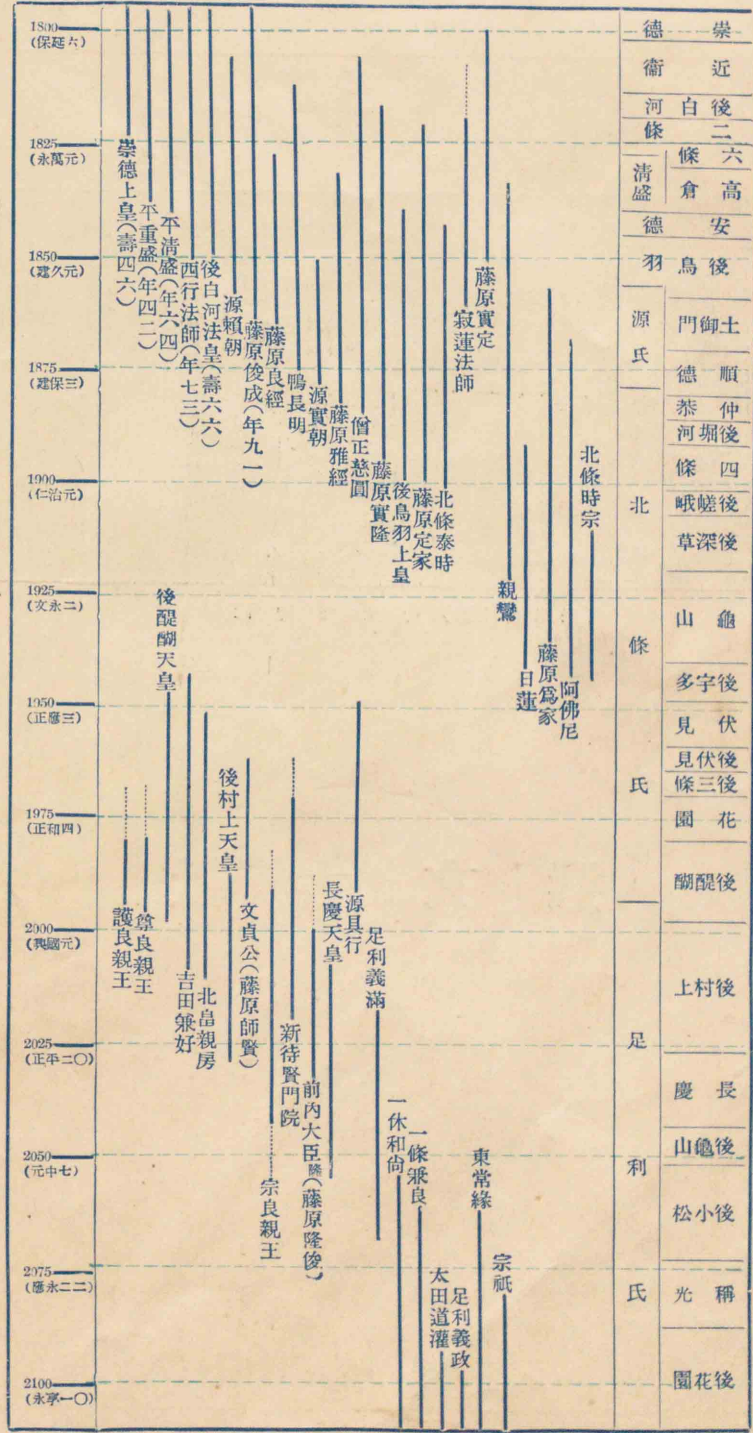
白「且元、覺悟。」

と抜打ちの襟がみ掴み頭顛倒、音ききつけて物蔭より、驚き駆け来る。十河今村郎黨ども、見返りもせず乗移る。秋さび月毛乗る人の、心や如何に白駒の、勇むを制する片手綱引戻さるる後髪、

兩人「さらば、さらば。」

と西東見送る方に霧や立つ、眼や曇るおぼろおぼろ、嘶く駒の聲はして、立別れ行く兩人が、この世に残す面影は、また見ぬ形とぞなりにける。

(坪内逍遙著、桐一葉による)



○ 謠曲と狂言

\*能舞臺の正面の後を仕切る板。その板には一本の老松が描かれてゐる。

謠曲及び狂言の演せられる舞臺は、鏡板に一本の老松を描いた外、何の背景もない簡素なものであつて、この舞臺に登場する俳優は、謠曲の方ではシテ、ワキ、ツレといひ、狂言の方ではオモアドと稱して、兩方とも一曲の登場人物は僅か二三人に過ぎない。舞臺が簡素で、登場人物が少數であるから、勢その脚色は千篇一律に陥り易いが、他面に於て甚だ象徴的暗示的に出來てゐて、その舞臺効果を收めてゐるのである。殊に謠曲では笛、大鼓、小鼓、太鼓の囃子方を伴なつて音樂的要素を具へ、その斷續する韻律が簡素な舞臺と相俟つて、暗示的效果を助成して居り、なほこの外に地謠の同吟があつて登場人物の科白を補ひ、觀衆の理解を助けて居るのである。

謠曲と狂言とは同じ舞臺で演せられるのであるが、兩者の作意は全く別個の立場にあつて、互に相對するやうになつてゐる。謠曲の觀衆に訴へるところは尙古的な理想の主張であり、狂言の見物に示すところは矛盾した現

實の暴露である。

謠曲の第一に主張するところは、皇室の尊嚴と國土の讚美とである。當時は足利將軍が專横を極めた時代であり、觀衆の大部分は武士であつたにも拘はらず、將軍を讚美し幕府を謳歌した語句は、謠曲數百番の全部を通じて一字も見出し得ないのである。かうして、謠曲は「天の羽衣まれにきて、撫づとも盡きぬ君が代を祝ひ、關の戸ささぬ天が下を喜んだのであるが、狂言はこれに反して、自利我慾の人情世想を描き出さうとしたから、その祝言物も、多くは社參する平民などが自身に福徳を授からうとし、他の者のためにする場合にも、直接の主人や領主などのために計るだけで、國家を眼目としたものは見當らないのである。併し、國家を眼目にしてゐないと言ふだけで、勿論反國家的のものもない。ただ、主人を愚弄してゐるものは少なからずある。狂言の大名は大抵は無智で、その家來に鬪弄されてゐるのである。

思ふに、室町武士の望むところは、平安貴族が持つてゐたやうな文學や藝術に關する知識や趣味であつた。この故に、謠曲作者はあらゆる先進文藝の粹を集めることに腐心し、文學・技藝の達人を無上に尊敬して、たとひ如何に現世で罪深かつた女性でも、文學に達したものは必ず佛菩薩となるとしてゐる。まして男性の文學者を崇敬したことは異常なもので、在原業平の如き歌聖は、衆生濟度の姿を顯したものととして、その詠歌を受けると非情の草木も佛果の縁を得ると説いてゐるのである。かほどまでに文藝を尊敬する時は、勢ひ殺伐な武事を嫌厭するやうになる。源平の勇將は實に室町武士にとつては尊敬すべき先輩であるにも拘はらず、戦争で花花しく討死した此等の勇將を、謠曲作者は悉く修羅道に陥れて苦しませてゐるのもこれがためであらう。併し、狂言はこれに反して、題材を世話巷説に取つて、古典に據らな

(一) 謠曲「羽衣」の中の句。  
(二) 謠曲「難波」の中の句。  
(三) 幸運を祈り、平安を祝ふといふ作意の狂言。

(四) 平安朝時代の歌人。

(五) 名は義秀、和田義盛の三男。勇武絶倫の士で、建保元年父に従つて北條氏を除かうとし、敗れて安房に走つた。その終る所は傳はつてゐない。

いばかりでなく、或は文字穿鑿の愚かしさを嘲り、或は家系を重んずる貴族かぶれを冷笑してゐる。又狂言作者の説に従へば、力の強い武士は何處までも幸福なものであつて、朝比奈の如きは、娑婆で力が強かつたために、地獄へ行つても閻魔王を負かしてゐるのである。

謠曲は社界的秩序を重んじて愈、これを高めようとしてゐるが、狂言は實



社會の裏面を描いて社會の缺陷を示すのであるから、狂言に現れる人物は、大名よりも家來の方が賢く、山伏よりも百姓の方が偉く、夫よりも妻の方が力強いのである。

謠曲作者は理想派であり、狂言作者は自然派である。理想は高い望であり、あこがれは夢のやうな心持である。この故に、理想派の謠曲が舞臺効果を擧げるためには、出来るだけその演出を幽玄にし、その氣分を夢幻的に導くことが大切でもあつたのである。謠曲の種類を大別して、脇能から五番目までの五種類とするが、その中、脇能二番目三番目の脚色は、大抵複式となつて居る。ワキの敕使とか僧侶とかが或神社なり或名所なりへ行くと、その地の住人として樵夫又は漁翁などの前ジテが來會はす。ワキがこの里人に神社の縁起なり名所の謂はれなりを尋ねると、里人は委しくその間に答へて後、自分は何神の化現であるとか、何某の亡靈であるとか言つて消える。ワキは奇特の思をして、その神前に參籠し、又は何某の回向をして、一夜をその處に過すうちに、何時とはなしに夢心地に誘はれて行く。ワキが夢心地になると、觀

\*能のその日の番組の最初に演ずるもの。その次が二番目で、以下五番目までを一組とするのである。

衆も亦夢幻的な境界に誘はれて行くのである。かうして、舞臺一面に夢幻的な情趣の漂つた處へ、後ジテが何神の影向、何某の亡靈として、正體正身の姿でワキの夢に現れるのである。即ち、複式能の後段は、劇中夢の場であるが、この夢は、甞に登場人物の一人が見てゐる夢ではなく、觀衆すべてがワキと共に見てゐる夢である。後ジテの演出を見て觀衆の受取る心持は、舞臺に登場した俳優の技藝ではなく、觀客各自の夢幻界に現れて來る神佛英雄佳人そのものなのである。この効果は他の戯曲に見られない謠曲の一大特色であつて、これこそ能樂が今日に至るまで永い生命を保つてゐる所以の一つであらう。

このやうに、後ジテを舞臺の人として見ず、觀衆の夢幻の世界、若しくは主觀の世界に立たせるためには、ワキの技藝力と觀衆の想像力とに俟つことが多いのであるが、この夢幻の世界を美化すると否とは、又後ジテの技藝の巧拙によつて分れるのであつて、十分な効果を奏するには、後ジテの演出が飽くまで幽玄であることを必要とするのである。華麗な詞章を謠ふのに鈍

重な聲調を以てし、優雅な舞や壯烈な働などを演ずるのに單純な所作を以てするのは、即ちこの幽玄な表現を期待する爲に外ならないのである。

狂言作者は自然派で、社會の實相の一面を捉へて、憚りなくその缺陷を剔出する。併し、このやうな目的に従事する文藝作家は、常に讀者又は觀衆との正面衝突を避け、讀者や觀衆にとつては他人事であるかのやうに脚色して、心あるものには諷刺と感せしめ、心足らぬものには滑稽と笑はしめる方策をとる。狂言は即ちこの方策をとつて、喜劇諷刺劇の形を具へてゐるのである。狂言に出て來る主人公を大別すれば、精神的又は肉體的に缺陷のあるものと、社會的又は個人的に優越してゐるものと、二種類になる。そして、主人公が普通人よりも劣つてゐる時は、觀衆はその主人公に對して一種優越の感を抱き、その距たりから滑稽味を覺える。末廣といふ語意を知らないために、都の商人に欺かれて、傘を買つて歸る「末廣がり」や、智入の禮式を知らないで、人に愚弄された言葉をそのまま式場で用ひる「吟じ智」は、最初から末廣の語意なり智入の禮式なりを知つてゐる觀者には、笑止千萬に感じられるの

である。心ある者は、この主人公と五十歩百歩の距たりに過ぎないわが愚かしさに反省するであらうし、心足らぬ者は只その滑稽に笑ひこけるであらう。作中の主人公が普通人よりも社會的地位の勝れてゐる者であると、總ての點に於て普通人より勝つてゐるやうに想像され易いが、これが實際を見ると、案外甚しい缺陷を持つてゐて、滑稽な失策を演ずる者が少なくない。かういふ失體を見せつけられた時には、觀者は豫想の裏切られた皮肉を感じるのである。平民に愚弄される多くの大名や、百姓に翻弄される山伏などがそれであつて、大名といへば地位が高く、知識も深い筈であり、山伏といへば效驗のあらたかであるべき筈であるのに、實は凡物と同様な缺陷を持つてゐるから、平凡人から愚弄されるのである。だから、その取材人物が特殊なものであるだけ、一層その諷刺の意味が濃厚に現れるのである。

形式的な方面を見ても、謠曲は典雅な平安朝時代の言葉と簡潔な鎌倉幕府時代の言葉とを交へたものであるが、狂言は通俗な室町幕府時代の言葉だけを用ひて居る。謠曲の人物は、急ぎ候ほどに「目的地」へ著くのであるが、狂

言の人物は多くは「そろりそろりと参る」のである。そして、その結末が、謠曲の方は、修羅道地獄道に苦しんでゐたものが、ワキ僧の回向によつてめでたく成佛するのであり、狂言の方は、始め詭計に成功してゐたものが、忽ち破綻に終つて、「やるまいぞ、やるまいぞ」と追込められるのである。即ち理想派の謠曲は悲劇に始まつて喜劇に終り、自然派の狂言は喜劇に始まつて悲劇に終るのである。

室町人士の要求に應じて始めて大成した邦劇の謠曲と狂言とは、時代相の明暗二面、即ち相反した各半面を代表して、一は夢幻的な憧憬の世界を仰ぎ、他は醜惡な現實の世界に直面し、讚美と反省と、希望と冷笑と、兩兩相對し、彼此互に對照して、然も同じ簡素な舞臺に交互に演せられて、今に各、その長處を發揮しつゝ傳へられて來てゐるのである。(佐成謙太郎)

佐成謙太郎 東  
京高等師範學  
校・京都帝國大  
學文學部出身。  
現に女子學習院  
教授。



鳥 (月岡耕漁筆) 八



一八島

人物

シテ

漁翁(後は源義經)

ツレ

漁夫

ワキ

僧

ワキツレ

從僧(二人)

讃岐國八島

時 所

春三月

ワキツレ<sup>キ</sup>次第、月も南の海原や、月も南の海原や、八島の浦を尋ねむ。

ワキ、これは都方より出でたる僧にて候。われ未だ四國を見ず候程に、この度思ひたち西國行脚と志し候。ワキツレ<sup>キ</sup>道行、春霞、浮きたつ波の沖つ舟、浮きたつ波の沖つ舟、入日の雲も影添ひて、そなたの空と行く程に、はるばるなりし船路經て、八島の浦に著きにけり、八島の浦

\*屋島とも書く。香川縣木田郡百高松の北に、一條の干潟を隔ててある島。壽永四年(益)二月、源平兩軍がここで戦つた。

に著きにけり。ワキ「急ぎ候程に、これははや讃岐の國八島の浦に著きて候。日の暮れて候へば、これなる鹽屋に立寄り、一夜を明かさばやと思ひ候。」

漁翁夜傍西岸宿、  
曉波清湘燒楚竹。  
(柳宗元)  
蘆を焚く火。

シテ「おもしろや、月海上に浮んでは、波濤野火に似たり。」ツレ「漁翁夜西岸に傍うて宿す。」ツレ「あかつき湘水を汲んで楚竹を焼くも、今に知られて蘆火のかげ、ほの見えそむる物すごさよ。」シテ「月の出汐の沖つ波。」ツレ「霞の小舟こがれ来て。」シテ「海士の呼聲。」ツレ「里近し。」シテ「一葉萬里の舟の道、ただ一帆の風に任す。」ツレ「夕べの空の雲の波。」ツレ「月のゆくへに立消えて、霞にかむ松原のかげは緑にうつろひて、海岸そことも知らぬ火の、筑紫の海にや續くらむ。」ここは八島の浦づたひ、海士の家居もかずかずに、釣のいとまも波の上、釣のいとまも波の上、霞み渡りて沖行くや、海士の小舟の、ほのぼのと見えて

残る夕ぐれ、浦風までものどかなる、春や心を誘ふらむ、春や心を誘ふらむ。」シテ「まづまづ鹽屋に歸り休まうずるにて候。」

ワキ「鹽屋の主の歸りて候。立越え宿を借らばやと思ひ候。いかにこれなる鹽屋の内へ案内申し候。」ツレ「誰にて渡り候ぞ。」ワキ「諸國一見の僧にて候。一夜の宿を御貸し候へ。」ツレ「暫く御待ち候へ、主にその由申し候べし。いかに申し候。諸國一見のお僧の、一夜のお宿と仰せ候。」シテ「易き程の御事なれども、餘りに見苦しく候程に、お宿は叶ふまじき由申し候へ。」ツレ「お宿の事を申して候へば、餘りに見苦しく候程に、叶ふまじき由仰せ候。」ワキ「いやいや見苦しきは苦しからず候殊に、これは都方の者にて、この浦はじめて一見の事にて候が、日の暮れて候へば、平に一夜と重ねて御申し候へ。」ツレ「心得申し候。只今の由申して候へば、旅人は都の人にて御入り候が、日の暮れて候

照りもせず曇りも  
はてぬ春の夜の臘  
月夜にしくものぞ  
なき(新古今集)  
大江千里

天つ風ふけひの浦  
にゐるたづのなど  
か雲居に歸らざる  
べき(新古今集)  
藤原清正

原本には「元暦元  
年三月十八日」と  
ある。今史實によ  
つて改めた。

源義經を指す。

鞍壺ともいふ。

後白河上皇。

武藏の國の住人。

平家方で、武勇の  
優れた侍であつ  
た。

へば、平に一夜と重ねて仰せ候。シテ、なに、旅人は都の人と申すか。  
ツレ、さん候。テ、げに痛はしき御事かな。さらばお宿を貸し申さむ。  
ツレ、もとより住みかも蘆の屋の、シテ、ただ草枕と思し召せ。ツレ、しか  
も今宵は照りもせず、シテ、曇りも果てぬ春の夜の、シテ、臘月夜にし  
く物もなき海士の苦。地、八島に立てる高松の、苔の筵は痛はしや。さ  
て慰みは浦の名の、さて慰みは浦の名の、群れゐる田鶴を御覽ぜよ。  
などか雲居に歸らざらむ。旅人の古里も、都と聞けばなつかしや。我  
等も元はとて、やがて涙に咽びけり、やがて涙に咽びけり。  
ツキ、いかに申し候。何とやらむ似合はぬ所望にて候へども、いにし  
へこの處は、源平の合戦の巷と承りて候。夜もすがら語つて御聞か  
せ候へ。シテ、易き間のこと、語つて聞かせ申し候べし。いでその頃は  
壽永四年二月十九日の事なりしに、平家は海の面一町ばかりに船

を浮め、源氏はこの汀にうち出で給ふ。大將軍の御いでたちには、赤  
地の錦の直垂に、紫裾濃の御著背長、鍙ふんばり鞍笠につつ立ちあ  
がり、一院の御使、源氏の大将檢非違使五位尉、源の義經と、名のり給  
ひし御骨がら、あつはれ大将やと見えし、今のやうに思ひ出でられ  
て候。ツレ、その時平家の方よりも、言葉戦ひ事終り、兵船一艘漕ぎよ  
せて、波打際に下り立つて、陸の敵を待ちかけしに、シテ、源氏の方に  
もつづく兵五十騎ばかり、中にも三保の谷の四郎と名のつて、眞先  
かけて見えし處に、シレ、平家の方にも悪七兵衛景清と名のり、三保  
の谷を目がけ戦ひしに、シテ、かの三保の谷はその時に、太刀うち折  
つて力なく、少し汀に引退きしに、ツレ、景清追つかけ三保の谷が、  
シテ、著たる兜の鍔を搦んで、ツレ、後へ引けば三保の谷も、シテ、身を遁  
れむと前へ引く。ツレ、互にえいやと、シテ、引く方に、地、鉢附の板より

源義經の家來で、この戦で主君の馬前に戦死した。  
 平家の勇將、能登守平教經。  
 平教經の家來。馬から落ちた繼信の首を搔取らうとして近寄つたが、繼信の弟忠信がこれを只一矢に射斃した。教經はその死骸を右手に攜んで、がらりと船の中へ投入されたといふ。  
 朝倉や木の丸殿に我居れば名のりをしつづ行は誰が子ぞ(天智天皇)  
 新嘗祭・大嘗祭などの時、齋戒を特に嚴重にして神事に仕へる人が、装束の上に着用する衣。

引きちぎつて、左右へくわつとぞ退きにける。これを御覽じて、判官お馬を汀に打寄せ給へば、佐藤繼信能登殿の矢先にかかつて、馬より下にどうと落つれば、船には菊王も討たれければ、共にあはれと思しけるか、船は沖へ陸は陣に、相引きに引く汐の、あとは関の聲たえて、磯の波松風ばかりの音寂しくぞなりにける。  
 地不思議なりとよ海士人の、あまり委しき物語、その名を名のり給へや。シテわが名を何と夕波の、引くや夜汐も朝倉や、木の丸殿にあらばこそ、名のりをしても行かまし。地げにや言葉を聞くからに、その名ゆかしき老人の、シテ昔を語る小忌衣。地頃しも今は、シテ春の夜の、地潮の落つる曉ならば、修羅の時になるべし。その時は、わが名や名のらむたとひ名のらずとも名のるとも、よしつねの浮世の夢ばし、覺まし給ふなよ、夢ばし覺まし給ふなよ。

(中 入)

ワキ「不思議や今の老人の、その名を尋ねし答にも、よしつねの世の夢心、覺まさで待てと聞えつる、」ワキツレ「聲も更けゆく浦風の、聲も更けゆく浦風の、松が根枕そばだてて、おもひをのぶる苔筵、重ねて夢を待ちぬたり、重ねて夢を待ちぬたり。」

後ジテ「落花枝にかへらず、破鏡ふたたび照らさず。然れどもなほ妄執の瞋恚とて、鬼神魂魄の境界にかへり、われとこの身を苦しめて、修羅の巷に寄り來る波の、淺からざりし業因かな。」ワキ「不思議やな、はや曉にもなるやらむと、思ふ寢覺の枕より、甲冑を帶し見え給ふは、若し判官にてましますか。」シテ「われ義經が幽靈なるが、瞋恚に引かるる妄執にて、なほ西海の波に漂ひ、生死の海に沈淪せり。」ワキ「おろかやな、心からこそ生き死にの、海とも見ゆれ眞如の月の、」シテ「春

現世で我慢猜忌の念の盛んな者は、死後ここに來て劍戟などの苦を受けると説かれる處。

落花難上枝、破鏡不重照。  
 (傳燈錄)

人間世界の意。

の夜なれど曇なき、心も澄めるこよひの空。」「ワキ昔を今に思ひ出づる、」シテ船と陸との合戦の道、」ワキ處からとて、」シテ忘れえぬ、」地武士の、八島にいるや槻弓の、八島にいるや槻弓の、元の身ながらまたここに、きり弓箭の道は迷はぬに、迷ひけるぞや生死の、海山を離れやらで、歸る八島の恨めしや。とにかくに執心の、のこりの海の深き夜に、夢物語申すなり、夢物語申すなり。」

地忘れぬものを、こ閻浮の故郷に、去つて久しき年波の、夜の夢路に通ひ來て、修羅道の有様あらはすなり。」シテ思ひぞ出づる昔の春、月も今宵に冪えかへり、」地もとの渚はここなれや、源平互に矢先を揃へ、船を組み駒を並べて、うち入れうち入れ足なみに、く轡を浸して攻戦ふ。」シテその時何とかしたりけむ、判官弓を取落し、波に揺られて流れしに、」地その折しもは引く汐にて、遙かに遠く流れゆくを、」シテ

増尾十郎兼房。義經の股肱の家來の一人。  
梶原景時と逆櫓の議論をしたこと。

子曰、知者不惑、仁者不憂、勇者不懼。  
(論語)

「敵に弓を取られじと、駒を波間におよがせて、敵船近くなりし程に、」地敵はこれを見しよりも、船を寄せ熊手にかけて、既に危く見え給ひしに、」シテされども熊手を切りはらひ、終に弓を取返し、もとの渚に打ちあがれば、」地その時兼房申すやう、口惜しの御振舞やな、渡邊にて景時が申ししも、これにてこそ候へたとひ千金を延べたる御弓なりとも、御命には代へ給ふべきかと、涙を流し申しければ、判官これを聞き召し、いやとよ弓を惜しむにあらず、義經源平に弓矢を取つて私なし。然れども、佳名は未だ半ばならず。さればこの弓を敵に取られ、義經は小兵なりと言はれむは、無念の次第なるべし。よしそれ故に討たれむは力なし、義經が運の極めと思ふべし。さらずは敵に渡さじとて、波に引かるる弓取の名は未代にあらずやと語り給へば、兼房さてその外の人までも、皆感涙を流しけり。」シテ知者は



惑はず、地勇者は懼れずの、やたけ心の梓弓、敵には取傳へじと、惜しむは名のため、惜しまぬは一命なれば、身を捨ててこそ後記にも、佳名を留むべき弓筆の蹟なるべけれ。

シテまた修羅道の鬨の聲、地矢さけびの音震動せり。シテ今日の修羅の敵は誰そ。なに能登守教經とや。あら物物しや手並は知りぬ。思ひぞ出づる壇の浦の、地その船軍今は早、その船軍今は早、閻浮に歸る生き死にの、海山一同に震動して、船よりは鬨の聲、シテ陸には波の楯、地月に白むは、シテ劍の光。地潮に映るは、シテ兜の星の影。地水や空、空行くもまた雲の波の、撃ちあひ刺しちがふる、船軍の掛引、浮き沈むとせし程に、春の夜の波より明けて、敵と見えしは群れゐる鷗、鬨の聲と聞えしは、浦風なりけり、高松の浦風なりけり、高松の朝嵐とぞなりにける。〔観世流改訂謄本による〕

二 末ひろがり

大名罷り出でたるは、隠れもない大名。太郎冠者あるか。冠者御前に。大名念なう早かつた。汝を喚び出すは別なる事でない。明日は何れもを申し入れうと思ふが、何とあらうぞ。冠者まことに内内は御意なうても、申し上げうと存ずる處に、一段でござりませう。大名よからうな。冠者はつ。大名さうあれば、引出物には何をか出さうな。冠者されば、何が好うござりませうぞ。大名やい、思ひつけた。下からは上が計らはれぬものぢや。某は末ひろがりを出さうと思ふが、何とあらうぞ。冠者ようござりませう。大名汝は大儀ながら、上方へ上り、急いで求めて参れ。冠者畏まつてござる。大名急げ。冠者はつ。さてもさても某が頼うだる者は、立板に水を流すやうに、物を言ひつけられまする。まづ急いで参らう。とかう申すうちに、都さうにござりまする。

やれさて失念の致した。末廣屋を存せぬが、何と致さうぞ。えい、欲しい物は呼ばはるていに見えてござる。某もこれから呼ばはりませうぞ。末廣買はう、末廣買はう。」

ナリ「罷り出でたるは、洛中に住居する、心も直にない者でござる。何者やら、どんどと申す程に、さわたつて見ませうずなうなう、其方は何をわつはとおしやるぞ。」冠者「その事でござる。田舎者でござれば、末廣屋を存せぬによつて、かやうに申す事でござる。」ナリ「なう、其方は末廣といふ物をお見知りやつたか。」冠者「なう、都人とも見えぬ。知つたれば、これを買はうといふ。」ナリ「なうなう、あやまりました。某は末廣屋の亭主で、をりやるによつて、懇に問うて、をりやる。」冠者「はて仕合せな事でござる。して末廣の出来合ひはござるか。」ナリ「なかなかござる。」冠者「急いで見せさつしやれ。」ナリ「心得てござる。それに待たつしやれ。」冠者「は。」

ナリ「やれさて、賣らうとは申してござるが、何を賣りませうぞ。思ひつけてござる。これに傘がござる程に、これを持って賣りませう。なうなう、田舎人、それにござるか。これこれ。」冠者「や、は、これが末廣でござるか。」ナリ「なかなか。」冠者「どれ見せさつしやれ。」ナリ「これ、ごろんじやれ。」冠者「は、まことに擴げさつしやれたれば、はて、いかい末廣でござる。さりながら、頼うだ人が注文のおこされてござる程に、これに合うたらば、買ひませう。」ナリ「さらば讀まつしやれい。」冠者「まづ地紙好くとしてござる。」ナリ「これこれ、地紙好くとは、この紙の事、をりやる。師走狐の如く、こんこんといふほど張つてござる。」冠者「骨磨とござる。」ナリ「これこれ、骨磨とは、この骨のこと、信濃木賊をかけて磨いたによつて、すべすべ致す。」冠者「要元縮めてとござる。」ナリ「要元縮めてとは、かう擴げて、この金でもつて、ぢつと縮めるによつて、此處のこと、でござる。」冠者「繪は戲繪としてござる。」ナリ「ふん、これ田舎

人、これへ寄らつしやれい。えい。」冠者なうなう、其方は、田舎人ぢやと思つて、打擲めさるか。」ナリいや、打擲ではおぢやらぬ。こなたと某とかうして戯れるをもつて、即ち戯繪といひまする。」冠者さてもさても、注文に合つて嬉しうござる。して價は如何程でござるぞ。」ナリ高直におぢやる。」冠者幾ら程でござるぞ。」ナリ萬疋をりやる。」冠者これはまた高い事でござる。ちつとねざりませう。」ナリおう、少しなどはぬいてやりませう。」冠者百ばかりになりますまいか。」ナリなう、其處な人、そのやうな下直な物ではない。ようお買やるまいぞ。」冠者申し申し、何と聞かつしやれたぞ。萬疋の内をば百ばかりもぬいて下されまいかと云ふ事でござる。」ナリはあ、聞分けました。五百ぬいて進じよ。」冠者忝なうこそござれ。」ナリして代物は、何處で渡さつしやれまする。」冠者三條の布袋屋で渡しませう。」ナリこれで受取りませう。」冠者忝なうござる。さらばさらば。」

ナリなう、なう。」冠者何でかござるぞ。」ナリ其方は定めし主持でござる。」冠者なかなか。」ナリ人の主は機嫌の善い事もあり、又悪い事もある。若し自然とも機嫌の悪しうおぢやるならば、斯うおしやつたが好うおぢやる。」冠者さてもさても忝なうこそござれ。」ナリようをりやつた。」

冠者やれさて、まづ頼うだ者に急いで御目にかけてうず。殿様ござりまするか。」ナリ太郎冠者、戻つたか。」冠者歸りました。」大名やら大儀や。急いで見せい。」冠者はつ。」大名こりや何ぢや。」冠者末廣でざりまする。」大名これがや。」冠者はあ、殿様のお合點が參らぬこそ道理でござりますれ。かう致しますると、きつう擴がりまする。」大名ふん、まことにこれはいかい末廣ぢやわいやい。して己は注文に合して來たか。」冠者「なかなか、合せましてござる。それで讀まつしやれませい。」大名急いで合せ居ろ。まづ地紙好しと。」冠者はあ、それこそ念を遣ひましたれ。」

この紙の事でござる。師走狐の如く、こんこんといふほど張つてござりまする。大名して又骨磨は。冠者はつ、この骨の事でござる。信濃木賊をかけて磨いてござるによつて、すべすべ致しまする。大名要元締めては。冠者かう擴げまして、この金で締めるをもつて、これが要元締めてと云ふところでござる。大名繪は戲繪は。冠者それにこそ念の遣ひましたれ。それに待たつしやれませい。や、覺えたか。大名「や、これは何をしてをるぞ。」冠者いや申し、この柄でかうして戲れるをもつて、ざれえと申しまする。大名やい其處な奴、して己は知らぬが定か。冠者はいや存じませぬ。大名知らずばこれへ寄りをろ。末廣とは扇のこと、これはおのれ古傘を買うてうせをり、いや末廣で候の、戲繪で候の、某が前へは叶ふまい。しさりをろ。やれさて憎い奴かな。

冠者まことに頼うだ人の云はるれば、これはさし傘ぢやげな物を。

ひよんな事を致した。さりながら、都の者も皆まではぬきませなんだ。機嫌直しを教へてくれた。まづ急いで申して見ませうず。(はやし)いえい、かさをさすならば、春日山、これも神の誓と、人がかさをさすなら、おれもかさささうよ。げにもさあり。やよ、げにもさうよの。やよ、げにおれもかさささうよ。げにもさあり。やよ、げにもさうよの。やよ、げにもさうよの。大名買物にはぬかれたが、よ、げにもさうよの。やよ、げにもさあり。やよ、げにもさあり。やよ、げにもさうよの。やよ、げにもさあり。やよ、げにもさうよの。まづ此方へこけ入つて、鰻の鮓をば、えいやつと頬張つて、ようか酒を飲めかし。冠者げにもさあり。やよ、げにもさうよの。大名何かの事はいるまい。人がかさをささうなら、俺にもかささせやれ。(笛)ひやろひやろ、ほつはい、ひやろ、ひい。(「狂言記」による)

賴朝  
賴朝  
實朝

坂上田村麻呂、屢蝦夷を征討して功を立てた。弘仁二年(四七)歿、年五十四。  
藤原利仁。延喜中、鎮守府將軍に任ぜられ、賊徒平定に功を立てた。生歿年不明。

③ 鎌倉三代

武きもののおのふのおこりを尋ぬれば、古の田村利仁などいひけむ將軍どもの事は耳遠ければさし措きぬ。そのかみより今まで、源平の二ながれず、時により折にしたがひて、おほやけの御守とはなりにける。

桓武天皇と聞えし御門をば、柏原御門とも申しけり。その御子に、式部卿の御子と聞えしより五代の末に、平將軍貞盛といふ人、維衡維時として二人の子をもたりけり。間近く榮えし西八條の清盛のおとどは、かの太郎の維衡より六代の末なりき。その一門亡びしかば、この頃は僅にあるか無きかにぞさまよふめる。さて、かの維時が名残は、ひたすらに民となりて、平の四郎時政といふ者のみぞ伊豆の

やにあめる。それも維時には六代の末なるべし。

又源氏武者といふも、清和の御門、あるは宇多の院などの御後どもなり。二條の院の御時、平治のみだれに伊豆の國蛭が島へ流されし兵衛佐賴朝は、清和の御門より八代のながれに、六條の判官爲義といひし者の孫なり。左馬頭義朝が三男になむありける。

西八條の入道おとどやうやう榮華衰へむとて、後白河の院を惱まし奉りしかば、安からずおぼされて、かの賴朝を召出でて、軍を起し給ひしに、然るべき時や到りけむ。平家の人人は、壽永の秋の木枯しに散りはてて、遂にわたつ海の底の藻屑と沈みにし後、賴朝愈權を施して、更に君の御後見を仕うまつる。相模の國鎌倉の里といふ處に居りながら、世をば掌の中に思ひき。皆人知り給へる事なれば、今更に申すもなかなかなれど、院のうへ、位に即かせ給ひし初より、

(三) 壽永二年(六三)七月、平家は安徳天皇を奉じて西に落ちて行つた。  
(四) 壽永四年三月、平家は壇浦に滅びた。  
(五) 壽永三年十月、鎌倉に公文所を設立し、問註所を置いた。

壽永四年八月十四日、改元して文治といふ。  
頼朝は從二位に敘せられた。  
後鳥羽天皇の建久元年(公)十一月に、頼朝は上洛した。

總追捕使。

上洛の翌月、十二月鎌倉に還つた。  
比叡山の座主、大僧正慈圓。

世のかためとなりて、文治元年四月二のはしをのぼりしも、屋島の内のおとど宗盛をいけどりの賞と聞ゆ。建久の初つ方、都にのぼる。その勢のいかめしきこと、言へば更なり。  
その年の霜月九日、權大納言になされて、右近大將をかねたり。師走の朔日頃よろこび申して、同じき四日やがてつかさを返し奉る。この時ぞ、諸國のそうつゐぶくしといふこと承りて、地頭職にわが家のつはものどもをなし集めける。この日本國の衰ふる始はこれよりなるべし。さて、あづまに歸り下る頃、上下色色のぬさ多かりし中に、年ごろも祈などし給ひし吉水僧正のたまひ遣はしける、  
あづまぢのかたに勿來の關の名は君をみやこに住めとな  
りけり  
御かへし、頼朝、

土御門上皇。その御即位は建久九年(八五)三月であつた。  
建久十年四月二十七日、改元して正治といふ。  
安徳天皇の御即位の年である。その八月、頼朝は伊豆に兵を擧げたのである。  
土御門天皇の御代の年號。(六六一六六四)

みやこには君にあふさかちかければ勿來の關はとほきとをしれ  
かくて、新院の御位の初つ方、正治元年正月十一日あづまにて頭おろして、同じき十三日、年五十三にてかくれにけり。治承四年より天の下に用ひられて、二十年ばかりや過ぎぬらむ。  
北の方は、先に聞えつる北條四郎時政の女なり。その腹にをのこ二人あり。太郎をば頼家といふ。弟をば實朝と聞ゆ。大將かくれて後、兄はやがて立繼ぎて、建仁元年六月二十二日從三位、同日將軍の宣旨を賜はる。又の年、左衛門督になさる。かかれども、少しおちゐぬ心ばへなどありて、やうやうつはものども背き背きにぞなりにける。  
時政は遠江守といひて、故大將の在りし時より、私の後見なりしを、まいて今は孫の世なれば、愈、身重く、勢そふこと限なく、うけばり

(二) 元久元年(公四)七月  
弒せられた。

(三) 順徳天皇の御代の  
年號。(公三十一)迄  
也

たる様なり。子あり。太郎は宗時、次郎は義時といへり。次郎は心も猛く、魂まされる者にて、左衛門督をばふさはしからず思ひて、弟の實朝の君に附従ひて思ひ構ふる事などもありけり。督は日にそへて人にも背けられ行くに、いとみじき病をさへして、建仁三年九月十六日、年二十二にて頭おろす。世の中のこり多く、何事もあたらしかるべき程なれば、さこそ口惜しかりけり。幼き子の一萬といふにぞ世をば譲りけれど、うけひく者なし。入道はかの病つくろはむとて、鎌倉より伊豆の國へ、いでゆ浴びに越えたりける程に、かしこの修善寺といふ處にて遂に討たれぬ。一萬もやがて失はれけり。これは實朝と義時と一つ心にてたばかりけるなるべし。  
さて、今はひとへに、實朝故大將の跡を受繼ぎて、官位とどこほる事なく、よろづ心のままなり。建保元年二月二十七日正二位せしは、

閑院の内裏造れる賞とぞきこえ侍りし。同じき六年權大納言になりて、左大將を兼ねたり。左馬頭をさへぞ附けられける。その年やがて内大臣になりても、なほ大將もとのままなり。父にもやや立ちまさりて、いみじかりき。このおとどは、おほかた心ばへうるはしく、猛くも優しくも、よろづ目やすければ、ことわりにも過ぎて、武士の靡き従ふさま、父にも越えたり。いかなる時にかありけむ。  
山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二ごころわがあらめやも

とぞ詠みける。

時政は建保三年にかくれにしかば、義時は跡を繼ぎけり。故左衛門督の子にて公曉といふ大徳あり。親の討たれにし事を、いかでか安き心あらむ。如何ならむ時にかとのみ思ひ渡るに、この内大臣ま

建保六年十二月に任官せられた。

建保七年四月十二日改元して承久といふ。

藤原公經の子。母は頼朝の妹の女。

た右大臣に上りて、大饗など珍しく東にて行ふ。都より尊者を始め上達部殿上人多くとぶらひいましけり。さて鎌倉に遷し奉れる八幡の御社に神拜に詣づる、いと厳めしき響なれば、國國の武士は更にも言はず、都の人人も扈從しけり。立騒ぎののしるもの、見る人も多かる中に、かの大徳打紛れて、女の眞似をして白き薄衣ひきををり、おとどの車より下るる程をさし覗くやうにぞ見えける。過たず首を打落しぬ。その程のどよみ、いみじさ、思ひ遣りぬべし。かくいふは承久元年正月二十七日なり。そこらつどひ集まれる者ども、只あきれたるより外の事なし。都にも聞し召し驚く。世の中、火を消ちたるさまなり。

扈從に西園寺の宰相中將實氏も下り給ひき。さらぬ人人も泣く泣く袖をしぼりてぞ上りける。(著者未詳、増鏡による)

#### 四 承久のみだれ

承久も三年になりぬ。四月二十日御門おりさせ給ふ。春宮四つにならせ給ふに譲り申させ給ふ。近ごろ皆この御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならむかし。同じき二十三日院號のさだめありて、今おりさせ給へるを新院と聞ゆれば、御兄の院をば中院と申し、父御門をば本院とぞ聞えさす。

さても院の思し構ふる事、忍ぶとすれど、やうやう漏れ聞えて、東ざまにもその心づかひすべかめり。東の代官にて伊賀の判官光季といふ者あり、かつがつ彼を御かうじのよし仰せらるれば、御方に参るつはものども押寄せたるに、遁るべきやうなくて、腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院は思し召しける。

順徳天皇。  
懷成親王、後の仲恭天皇。

土御門上皇。

後鳥羽上皇。

本院。

恩  
御  
院



東にもいみじうあわて騒ぐ。さるべくて身の失すべき時にこそ  
あなれと思ふものから、討手の攻め來りなむ時には、はかなき様にて  
屍を曝さじ。おほやけと聞ゆとも、自らし給ふことならねば、かつは  
わが身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と、泰時とい  
ふ一男と、二人をかしらとして、雲霞のつはものをたなびかせて都  
にのぼす。泰時を前に据ゑていふやう、おのれをこのたび都に參ら  
する事は、思ふ所おほし。本意の如く清き死にをすべし。人にうしろ  
を見えなむには、親の顔また見るべからず。今をかざりと思へ。賤し  
けれども、義時、君の御ために後めたき心やはある。されば横ざまの  
死にをせむ事はあるべからず。心を猛く思へ。おのれ打勝つものな  
らば、再びこの足柄箱根の山は越ゆべし。など泣く泣くいひ聞かす。  
まことにしかなり、また親の顔拜まむ事もいとあやふしと思ひて、

泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに今やかざりと、あはれに心細げな  
り。

かくて打出でぬるまたの日、思ひかけぬほどに、泰時只一人鞭を  
上げて馳來たり。父胸うちさわぎて、いかにと問ふに、軍のあるべき  
やう、大方の掟などをば、仰の如くその心を侍りぬ。若し道のほと  
りにも、圖らざるに、かたじけなく鳳輦をさきだてて御旗をあげら  
れ、臨幸の嚴重なることも侍らむに參り會へらば、その時の進退い  
かが侍るべからむ。この一事を尋ね申さむとて、一人馳せ侍りき。と  
いふ。義時とばかり打案じて、かしこくも問へるをのこかな。その事  
なり。まさに君の御輦に向ひて弓を引くことはいかがあらむ。さば  
かりの時は、兜を脱ぎ、弓の弦を切りて、偏にかしこまりを申して、身  
をまかせ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましなから、軍兵を

藤原氏。その妻が頼朝に因縁あるを恃んで、驕恣な振舞があつた。寛元二年(二六〇)歿。  
 藤原頼經。實朝の歿後、鎌倉に下り、やがて將軍宣下があつた。因に、頼經の母は、公經の女であつた。  
 藤原氏。出家して保運と號した。  
 源義朝  
 頼朝  
 能保女  
 公經女  
 道家  
 藤原信隆の女、殖子。高倉天皇の門で、後鳥羽上皇の御生母。  
 順徳院の御母。

たまはせば命を捨てて、千人が一人になるまで戦ふべし」と言ひもはてぬに、急ぎ立ちにけり。  
 都にも思し設けつる事なれば、武士ども召しつどへ、宇治瀬田の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用心ことなり。公經の大將一人のみなむ、御孫の事もさる事にて、北の方、一條中納言能保といふ人の女なり、その母北の方は故大將のはらからなれば、一方ならず東を重くおぼして、さしいらへもせず、院の御心の輕き事とあぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門、大納言忠信、尾張中將清經、中御門、大納言宗家、また修明門院の御はらからの甲斐、宰相中將範茂など、次次あまた聞ゆれど、さのみは記し難し。軍にまじり立つ人、この外の上達部にも殿上人にも數多ありき。  
 中院はあかで位をすべり給ひしより、言に出でてこそものし給

はねど、世のいと心やましきままに、かやうの御騒ぎにも殊にまじらひ給はざめり。新院は同じ御心にて、よろづ軍の事なども掟て仰せられたり。

いつの年よりも五月雨はれ間なくて、富士川、天龍などえもいはず漲りさわぎで、いかなる龍馬も打渡しがたければ、攻めのぼる武者どももあやしく惱めり。かかれども、遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出でたつ。その勢六萬餘騎とかや、宇治瀬田へ分ちつかはす。世の中響きののしるさま、言の葉も及ばず、まねび難し。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落ちくだり、すべて安げなく騒ぎみちたり。いかがあるむと、君も御心亂れておぼし惑ふ。かねては猛く見えし人人も、まことの際になりぬれば、いと心あわただし、色を失ひたるさまども、頼もしげなし。六月十日あまりにや、いく

女院  
天皇の位まで  
おられたり

(一) とりかへす物にも  
がなや世の中を  
りしながらのわが  
身と思はむ(源氏  
物語河海抄)  
(二) 藤原隆信の子で、  
父子共に肖像畫の  
名人であつた。

ばくの戦だになくて、遂にみかたの軍敗れぬ荒磯に高潮などのさ  
し来るやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはむ方なくあき  
れて、上下ただ物にぞあたり惑ふ。  
東より言ひおこするまに、かの二人の大將軍はからひ掟てつ  
つ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院宮  
宮、處處におぼし惑ふことさらなり。本院は隱岐の國におはします  
べければ、まづ鳥羽殿へ、綱代車のあやしげなるにて、七月六日入ら  
せ給ふ。今日をかぎりの御ありき、淺ましうあはれなり。物にもがな  
やと思さるるもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に  
一つ二つや餘らせ給ふらむ。まだいとほしかるべき御程なり。信實  
朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はむとなり。か  
くて同じき十三日に御船にたてまつりて、遙かなる波路を凌ぎお

地下人

源氏  
御心も  
しるや  
人

はします御心地、この世の同じ御身とおぼされず、いみじう、いか  
なりける代代の報にかと恨めし。  
新院も佐渡の國に遷らせ給ふ。まことや、七月九日御門をもおろ  
し奉りき。この四月かとい、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうな  
り。七十餘日にており給へるためしも、これや始なるらむ。さて、上達  
部殿上人、それより下はた残るなく、この事に觸れにしたぐひは、重  
く軽く罪に當るさまいみじげなり。  
中院は、初より知し召さぬ事なれば、東にも咎め申さねど、父の院  
遙かに遷らせ給ひぬるに、長閑にて都にあらむこと、いとおそれあ  
りと思されて、御心もて、その年閏十月十日、土佐の國の幡多といふ  
處に渡らせ給ひぬ。いとあやしき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら  
雪かきくらし、風ふき荒れ、吹雪して、來しかた行くさきも見えず、い

邊で  
海で

と堪へがたきに、御袖もいたく凍りて、わりなき事多かるに、  
うき世にはかかれとてこそ生れけめことわり知らぬわが  
涙かな  
せめて近き程にと、東より奏したりければ、後には阿波の國に遷ら  
せ給ひにき。

さてこのたび世のありさまげにいとうたて口惜しきわざな  
り。あるは父の王を失ふためしだに、一萬八千人までありけりとこ  
そ佛も説き給ひためれ。まして世くだりてのち、唐土にも、日の本に  
も、國を争ひて戦をなすこと數へ盡すべからず。それも皆一ふし二  
ふしの上せはありけむ。もしはすぢ異なる大臣、さらでもおほやけ  
ともなるべききざみの、少しのたがひめに、世に隔たりて、その恨の  
末などより事起るなりけり。今のやうに、無下の民と争ひて、君の滅

劫初以來有諸惡  
王、實、國位、故、殺、  
其父二萬八千人。  
(觀無量壽經)

共に朱雀天皇の御  
代の年號。  
堀河天皇の御代の  
年號。  
後白河法皇。

び給へるためし、この國にはいとあまたも聞えざめり。されば、承平  
の將門、天慶の純友、康和の義親、いづれも皆猛かりけれど、宣旨には  
勝たざりき。保元に崇徳院の世をみだり給ひしだに、故院の御位に  
て打勝ち給ひしかば、天照る御神も、御裳濯川の同じ流と申しなが  
ら、なほ時の御門を守り給はする事は強きなめりとぞ、古き人人も  
聞えし。また信賴の衛門督、おほけなく二條の院をおびやかし奉り  
しも、遂に空しき屍をぞ道のほとりに捨てられける。かかれれば、ふり  
にし事を思ふにも、なほさりともしいかでか、上皇、今上あまたおはし  
ます。王城の、いたづらに亡ぶるやうやはあらむと、頼もしくこそお  
ぼえしに、かくいとあやなきわざの出で來ぬるは、この世ひとつの  
事にもあらざらめども、まよひのおろかなる前には、なほいとあや  
しかし。(著者未詳増鏡による)



後村上天皇 第九十七代。後醍醐天皇の第七皇子。御在位二十九年。正平二十三年(三三六)住吉行宮に崩御。御壽四十一。

大德禪寺者宜<sup>シ</sup>。爲<sup>ル</sup>本朝無雙之禪苑。安棲千衆。令<sup>レ</sup>祝萬年。門弟相承。不<sup>レ</sup>許他門住。不<sup>レ</sup>是偏狹之情。爲<sup>ル</sup>重法流。殊<sup>ニ</sup>染<sup>ル</sup>於<sup>テ</sup>龍華<sup>ニ</sup>耳。元弘三年八月廿四日。宗峯國師禪室。

後醍醐天皇 第九十六代。後宇多天皇の皇子。御在位二十年。延元四年(二九七)吉野に崩御。御壽五十二。

五 春のひかり

立つ春の心をよませ給うける 後村上天皇

出づる日に春のひかりはあらはれて年たちかへる天の香具山

題しらず 後醍醐天皇

今はよも枝にこもれる花もあらし木の芽はるさめ時を知る頃

吉野の行宮にて人人に千首の歌め

大德禪寺者宜  
の本朝無雙之  
禪苑安棲千衆  
令祝萬年門弟  
相承不許他門  
住不是偏狹之  
情爲重法流殊  
染於龍華耳  
元弘三年八月  
廿四日  
宗峯國師禪室

後醍醐天皇宸筆

長慶天皇 第九十八代。後村上天皇の第一皇子。在位十六年。應永元年(三三三)崩御。御壽五十二。

文貞公 吉野朝の忠臣。藤原師賢の諱。元弘二年(二九七)下總に流されて歿した。

新待賢門院 後醍醐天皇の皇后。正平十四年(三三九)崩御。

春の歌の中に

文貞公

されし序に山花といふ事をよませ給うける御歌

わが宿とたのまずながら吉野山花に馴れぬる春もいくとせ

うれへあれば聞くこといとふわが身とも知らでやここに鶯の鳴く

後醍醐天皇かくれさせ給ひて又の年の春花を見て

よませ給うける 新待賢門院

時しらぬなげきのもとに如何にしてかはらぬ色に花の咲くらむ

○ 水邊の螢をよませ給うける  
後村上天皇  
夏くさのしげみが下のうもれ水ありとしらせて行く螢かな

○ 五百番の歌合に  
長慶天皇

○ 風はやみしぐるる雲もたえだえにみだれてわたる雁のひと  
つら

○ 千首の歌奉りしとき聞<sub>レ</sub>蟲<sub>ヲ</sub>  
宗良親王

○ 床は荒れてたが秋ならぬ蟲の音を古きまくらの下に聞くか  
な  
尊良親王

宗良親王 後醍醐天皇の皇子。「新業和歌集」の撰者。弘和元年(一一三二)御年七十。但しその後の御消息未詳。

尊良親王 後醍醐天皇の第一皇子。延元二年(一一三三)金崎城の陥つた時自刃せられた。

○ 世の憂さを空にも知るや神無月ことわり過ぎて降るしぐれ  
かな

○ 正平二十年内裏の三百六十首の中に寄<sub>スルニ</sub>弓述懷  
前内大臣隆俊

○ 君がためわが取りきつる梓弓もとのみやこにかへさざらめ  
や

○ 吉野の行宮にてよませ給うける御歌の中に  
後醍醐天皇

○ 臥しわびぬ霜さむき夜の床は荒れて袖にはげしき山おろし  
の風  
(「新業和歌集」による)

前内大臣隆俊 吉野朝の忠臣。藤原氏。文中二年(一一三三)戦歿。

六 正成兄弟の討死

楠木判官正成舍弟帶刀正季に向つて申しけるは、敵前後を遮つて、身方は陣を隔てたり。今は遁れぬところと覺ゆるぞ。いざや、まづ前なる敵を一散らし追ひまくつて、後なる敵に戦はむ。と申しければ、正季然るべく覺え候。と同じて、七百餘騎を前後に立てて、大勢の中へぞ駈入りける。

左馬頭のつはものども、菊水の旗を見て、好き敵なりと思ひければ、取籠めてこれを討たむとしけれども、正成正季、東より西へ割つて通り、北より南へ追靡け、好き敵と見るをば馳並べて組んで落ちては首を取り、合はぬ敵と思ふをば一太刀打つて駈散らす。正成と正季と七度合うて七度分る。その心、ひとへに左馬頭に近づき、組ん

(三) 足利直義。

(四) 今は神戸市に合併されて、その西部に當る。

(五) ここも今は蓮池町と稱して、神戸市の中に編入されてゐる。

(六) 足利尊氏。

で討たむと思ふにあり。遂に左馬頭の五十萬餘騎、楠木が七百餘騎に駈靡けられて、又須磨の上野の方へぞ引返しける。直義朝臣の乗られたりける馬、矢尻を蹄に踏立てて、右の脚を引きける間、楠木が勢に追詰められて、已に討たれ給ひぬと見えけるところに、薬師寺十郎次郎只一騎、蓮池の堤にて返し合せて、馬より飛んで下り、二尺五寸の小長刀の石突を取延べて、かかる敵の馬の平頸胸繫の引廻し、切つては刎ね倒し、刎ね倒し、七八騎がほど切つて落しけるその間に、直義は馬を乗替へて、はるばる落延び給ひけり。

左馬頭楠木に追つたてられて引退くを、將軍見給ひて、新手を入れかへて、直義討たすな。と下知せられければ、吉良石堂高上杉の人六千餘騎にて、湊川の東へ駈出でて、跡を切らむとぞ取巻きける。正成正季また取つて返して、この勢にかかり、駈けては討違へて殺

し、駈入つては組んで落ち、三時が間に十六度まで戦ひけるに、その勢次第次第に滅びて、あとは僅に七十三騎にぞなりにける。この勢にても打破つて落ちば落つべかりけるを、楠木京を出でしより、世の中のことは今はこれまでと思ふ所存ありければ、一足も引かず戦つて機已に疲れければ、湊川の北に方つて在家の一村ありける中へ走り入つて、腹を切らむ爲に、鎧を脱いで我が身を見るに、斬疵十一个處までぞ負ひたりける。この外七十二人の者どもも、皆五个處三个處の疵を被らぬ者はなかりけり。

楠木が一族十三人、手の者六十餘人、六間の客殿に二行に並みゐて、念佛十返ばかり同音に唱へて、一度に腹をぞ切つたりける。正成座上に居つつ、舍弟の正季に向つて、抑、最期の一念に依つて、善惡の生を引くといへり。九界の間に、いづくか御邊の願なる。と問ひけれ

\*地獄界・餓鬼界・畜生界・阿修羅界・人間界・天上界・聲聞界・緣覺界・菩薩界をいふ。



(載所「記平太入繪」)死討の弟兄成正

ば、正季からからとうち笑ひて、七生までただ同じ人間に生れて、朝敵を滅ぼさばやとこそ存じ候へ。と申しければ、正成よに嬉しげなる氣色にて、罪業深き惡念なれども、我もかやうに思ふなり。いざさらば、同じく生を替へてこの本懷を達せむ。と契つて、兄弟ともに刺違へて、同じ枕に伏しにけり。橋本八郎正員、宇佐美河内守正安、神宮寺太郎兵衛、正師和田五郎正隆を始として、宗徒の一族十六人相從ふつはもの五十餘人、思ひ思ひに並みゐて、一度に腹をぞ切つたりける。菊池七郎武朝は、兄



菊池武重。武時の子。新田氏に従つて、一生、足利氏と戦つた吉野朝の忠臣。

共に後醍醐天皇を指す。

の肥前守が使にて、須磨口の合戦の體を見に來りけるが、正成が腹を切る處へ行合せて、おめおめしく見捨ててはいかが歸るべきと思ひけるにや、同じく自害をして、炎の中に伏しにけり。  
抑、元弘よりこの方、かたじけなくもこの君に頼まれ參らせて、忠を致し功に誇るもの幾千萬ぞや、然れども、このみだれまた出で來て後、仁を知らぬものは朝恩を捨てて敵に屬し、勇なきものは苟も死を免れむとて刑戮に逢ひ、智なきものは時の變を辨ぜずして道に違ふことのみありしに、智仁勇の三徳を兼ねて死を善道に守りしは、古より今に至るまで、正成ほどのものは未だ無かりつるに、兄弟ともに自害しけるこそ、聖主再び國を失ひて、逆臣よこしまに威を振ふべき、その前表のしるしなれ。(著者未詳「太平記」による)

### 七 正行吉野へ參る

(四) 今は大阪市住吉區にある町。天王寺以南、住吉祠に至る一帯の地で、昔は沙丘であつた。  
(五) 正平二年。(1197)  
(六) 今の大阪市の天満と天神との兩橋の間に架かつてゐたといふ。  
(七) 大阪府中河内郡枚岡南村大字四條の野をいふ。

阿部野の合戦は霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋より堰き落されて流るるつはもの五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、川より引上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結んで、生くべしとも見えざりけるを、楠木なさけあるものなりければ、小袖を脱ぎかへさせて身を暖め、藥を與へて疵を療ぜしむ。かくの如く四五日皆いたはりて、馬に乗るものには馬を引き、物の具失へる人には物の具を著せて、色代してぞ送りける。されば、敵ながらそのなさを感ずる人は、今日より後心を通はさむことを思ひ、その恩を報ぜむとする人は、やがて彼の手に屬して、後四條繩手の合戦に討死をぞしける。

八月藤井寺の戦  
と十一月安部野の  
戦。  
足利尊氏。  
足利直義。

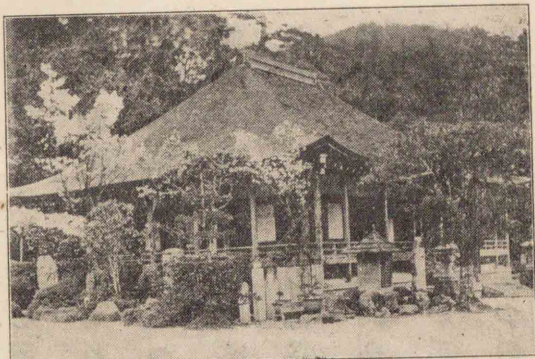
後醍醐天皇。

さても、今年兩度の合戦に、京勢むげに打負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はる。遠國また蜂起しぬと告げければ、將軍左兵衛督の周章、ただ熱湯にて手を洗ふが如し。今は末末の源氏、國國の催し勢などを向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏、守師直越後、守師泰兄弟を兩大將にて、四國中國東山東海、二十餘個國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀八幡に著きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行舍弟正時、一族うちつれて、十二月二十七日、吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成、庖弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休めまゐらせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候間、危きを見て命を致すところ、かねて思ひ定め候ひけるによつて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ畢んぬ。その時

正行十三歳に罷り成り候ひしを、合戦の場へは伴なはで、河内へ返し、死残り候はむずる一族を扶持し、朝敵を滅ぼし、君を御代に即けまゐらせよ。と申し置きて死して候。然るに、正行正時、已に壯年に及び候ひぬ。この度われと手を碎き合戦仕り候はずば、かつは亡父の申しし遺言に違ひ、かつは武略のいふかひなき謗に落つべく覺え候。有待の身思ふに委せぬならひにて、病に犯され早世仕ること候ひなば、ただ君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不幸の子となるべきにて候間、今度、師直、師泰に駈合ひ、身命を盡し合戦仕つて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候か、正行、正時が首を彼等に取られ候か、その二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顔を拜し奉らむために參内仕つて候。と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に顯れければ、傳奏いまだ

後村上天皇  
紫宸殿をいふ。



奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞ濡らされける。

主上、乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、龍顔ことに麗しく、諸卒を

照臨あつて、正行を近く召して、以前兩度の

戦に勝つ事を得て、敵軍の氣を屈せしむ、叡

慮まづ憤を慰する條、累代の武功かへすが

意へすも神妙なり。大敵今勢を盡して向ふな

輪れば、今度の合戦天下の安否たるべし。進退

堂度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心と

する所なれば、今度の合戦、手を下すべきに

あらずといへども、進むべきを知つて進む

は時を失はざらむが爲なり、退くべきを見て退くは後を全うせむ

が爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし。と仰せ出さ

照臨  
紫宸殿  
南殿  
御簾  
龍顔  
諸卒  
進退  
堂度  
變化機  
勇士の心  
退くべき  
後を全うせむ  
股肱  
命を全うすべし  
仰せ出さ

れければ、正行頭を地につけて、とかくの敕答に及ばず、只これを最後の参内なりと思ひ定めて退出す。

正行・正時・和田新發・意舍弟・新兵衛・同紀六左衛門・子息二人・野田四

郎子息二人・楠木將監・西川子息・關地良圓以下、今度の軍に一足も引

かず、一處にて討死せむと約束したりける兵百四十三人、先皇の御

廟に参つて、今度の軍難儀ならば、討死仕るべき暇を申して、如意輪

堂の壁板に、各名字を過去帳に書きつらねて、その奥に、

かへらじとかねて思へば、梓弓なき數にいる名をぞとどむ

る

と、一首の歌を書きとどめ、逆修のためと思しくて、各鬢髪を切つて佛殿に投入れ、その日吉野を打出でて、敵陣へとぞ向ひける。

(著者未詳、太平記による)

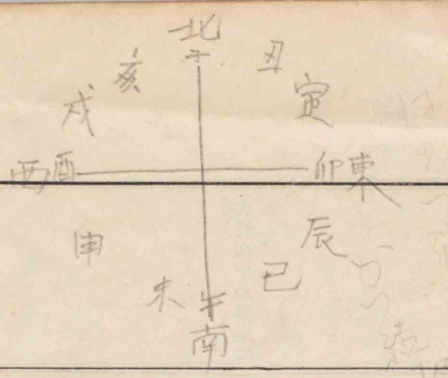
(三) 吉野山中の塔尾にある。

### 八 朝顔の露

#### 一、行く川の流

行く川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず、よどみに浮ぶ泡沫は、かつ消えかつ結びて、久しく留まることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。

玉敷の都のうち、棟を並べ、藁を争へる、高き卑しき人のすまひは、代代を経て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて、今年造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。處も變らず人も多かれど、いにしへに見し人は、二三十人が中に、僅に一人二人なり。朝に死し夕べに生るるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。



夜  
子 丑 寅 卯 辰 巳 午  
未 申 酉 戌 亥 子

知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて何方へか去る。又知らず、假の宿り誰がために心を悩まし、何によりてか目を悦ばしむる。その主人と住家と無常を争ひ去るさま、言はば朝顔の露に異ならず。あるは露落ちて花残り、残るといへども朝日に枯れぬ。あるは花はしぼみて露なほ消えず、消えずといへども夕べを待つことなし。

#### 二、大火

凡そ物の心を知りしより以來、四十あまりの春秋を送れる間に、世の不思議を見ることやや度度になりぬ。いにし安元三年四月二十八日かとよ、風烈しく吹きて、靜かならざりし夜、戌の時ばかり、都の巽より火出で來りて、乾に至る。はてには、朱雀門、大極殿、大學寮、民部省まで移りて、一夜が程に塵灰となりにき。火元は樋口富小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來けるとなむ。吹きまよふ風にと

\*高倉天皇の御代の年號。その三年(二)公三八月四日改元して治承といふ。

金・銀・瑠璃・碾磑・瑪瑙・琥珀・珊瑚

かく移り行く程に、扇をひろげたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙に咽び、近きあたりはひたすら焰を地に吹きつけたり。空には灰を吹立てたれば、火の光に映じてあまねく紅なる中に、風に堪へず吹切られたる焰、飛ぶが如くにして一二町を越えつつ移り行く。その中の人うつし心あらむや。あるは煙に咽びて仆れ伏し、あるは焰にまぐれて忽に死しぬ。あるは又わづかに身一つ辛くして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず、七珍萬寶さながら灰燼となりにき。その費いくばくぞ。  
このたび公卿の家十六焼けたり。ましてその外は數を知らず。すべて都のうち三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬牛のたぐひ邊際を知らず。人のいとなみ皆おろかなる中に、さしも危き京中の家を造るとて財を費し心を悩ますことは、すぐれてあぢき

なくぞ侍るべき。

三、辻風

高倉天皇の御代の年號。(二八七—二八八)

世界破滅の時に、三災といつて、火災・水災と共に起ると佛説にいふ風災をいふ。

又治承四年四月二十九日の頃、中御門京極の程より大きな辻風起りて、六條わたりまで嚴めしく吹きけること侍りき。三四町を掛けて吹きまくる間に、その中に籠れる家ども、大きなも小さきも、一つとして破れざるはなし。さながらひらに倒れたるもあり、桁柱ばかり残れるもあり。又門の上を吹放ちて四五町が程に置き、又垣を吹拂ひて隣と一つになせり。況や家の内の寶數を盡して空に揚り、檜皮葺板のたぐひ、冬の木の葉の風に亂るるが如し。塵を煙の如くに吹立てたれば、すべて目も見えず。おびただしく鳴りとよむ音に、物言ふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かくこそはとぞ覺えける。

家の損亡せるのみならず、これを取繕ふ間に、身を害ひて片はづけるもの數を知らず。この風坤の方に移り行きて、多くの人のなげきをなせり。辻風は常に吹くものなれど、かかる事やはある。ただ事にあらず、さるべき物のさとしかなとぞ疑ひ侍りし。

四、飢 饑

養和の頃かとよ、久しくなりて確に覺えず。二年が間飢渴して、あさましきこと侍りき。あるは春夏日でり、あるは秋冬大風大水など、よからぬことども打續きて、五穀悉くみのらず。空しく春耕し夏植うるいとなみのみありて、秋刈り冬收むるぞめきはなし。これによりて、國國の民あるは地を捨てて境を出で、あるは家を忘れて山に住む。さまざまの御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行はるれども、更にその效なし。

(二) 安徳天皇の御代の年號。(八四一—八四二)

京のならひ、何わざにつけても、みなもとは田舎をこそ頼めるに、絶えて上る者なければ、さのみやは操も作りあへむ。念じわびつつ、さまざまの財物かたはしより捨つるが如くすれども、更に目見たつる人もなし。たまたま易ふる者は、こがねを軽くし粟を重くす。乞食道のべに多く、愁へ悲しむ聲耳に滿てり。

先の年かくの如く、辛くして暮れぬ。明くる年は立ちなほるべきかと思ふに、あまさへ疫病うち添ひて、まさるやうに跡方なし。世の人みな飢ゑ死にければ、日を経つつ窮まり行くさま、少水の魚の譬にかなへり。はてには笠うち著足ひき包み、よろしき姿したるもの、ひたすら家毎に乞ひありく。かくわびしれたるものども、ありくかと思れば、則ち仆れ死ぬ。ついひぢのつら路のほとりに飢ゑ死ぬるたぐひは數も知らず。取捨つるわざもなければ、臭き香世界に充ち

(三) 是日已過、命則衰減、如少水魚、斯有何樂。(「往生要集」)

賀茂の河原

満ちて、變り行く形ありさま、目も當てられぬこと多かり。況や河原

などには馬車の行きちがふ道だにもなし。

賤山がつも力つきて、薪にさへ乏しくなりゆけば、頼むかたなき

人は、みづから家を毀ちて、市に出でてこれを賣るに、一人が持ち出

でたる價、なほ一日が命を支ふるにだに及ばずとぞ、怪しき事は、か

かる薪の中に、丹つき、白がね、こがねの箔など處處につきて見ゆる

木のわれ相混れり。これを尋ねれば、すべき方なきものの、古寺に至

りて佛を盗み、堂の物の具を破り取りて、割碎けるなりけり。濁悪の

世にしも生れあひて、かかる心うきわざをなむ見侍りし。

又あはれなること侍りき。さり難き女男など持ちたる者は、その

志まさりて深きは、必ず先だちて死しぬ。その故は、わが身をば次に

なして、男にもあれ、女にもあれ、いたはしく思ふ方に、たまたま乞ひ

京都府葛野郡花園村にある。

得たる物をまづ譲るに由りてなり。されば、親子ある者は、定まれる事にて、親ぞ先だちて死にける。又母が命盡きて臥せるをも知らずして、いとけなき子の、その乳房に吸ひつきつつ臥せるなどもありけり。

仁和寺に隆曉法印といふ人、かくしつづ數しらず死ぬることを

悲しみて、ひじりを數多かたらひつつ、その死首の見ゆる毎に、額に

阿字を書きて縁を結ばしむるわざをなむせられける。その人數を

知らむとて、四五兩月がほど數へたりければ、京のうち、一條より南

九條より北、京極より西、朱雀より東、道のほとりにある頭、すべて四

萬二千三百餘なむありける。況や、その前後に死ぬるもの多く、河原

白河西の京もろもろの邊地などを加へて言はば、際限もあるべか

らず。いかに況や、諸國七道をや。近くは崇徳院の御位の時、長承の比

京都の東北郊外。崇徳天皇の御代の年號。(一五二)一五

安徳天皇の御代の  
年號。(八四一—八四  
五)但し原本には  
「元暦二年」と書い  
てある。

五、地震

かよ、かかるといふためしはありけると聞けど、その世の有様は知らず、  
まのあたりいとめづらかに悲しかりし事なり。  
壽永四年の頃おほなるふること侍りき。そのさま世の常ならず。  
山崩れて川を埋み、海傾きて陸を浸せり。土裂けて水湧きあがり、巖  
割れて谷にまろび入り、渚漕ぐ船は波に漂ひ、道行く駒は足のたち  
どを惑はせり。況や、都のほとりには、在在處處、堂舎塔廟、一つとして  
全からず。あるは崩れ、あるは倒れぬる間、塵灰立ちあがりて盛んな  
る煙の如し。地の震ひ家の破るる音、いかづちに異ならず。家の中に  
居れば忽に打ちひしげなむとす。走り出づれば又地割れ裂く。羽な  
ければ空へもあがるべからず。龍ならねば雲にのぼらむこと難し。  
恐の中に恐るべかりけるは、ただなるなりけりとぞ覺え侍りし。

木  
地

地・水・火・風

その中に、ある武士のひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、つ  
いひぢのおほひの下に小家を造り、はかなげなる跡なし事をして  
遊び侍りしが、俄に崩れうめられて、跡方なく平に打ちひさがれて、  
二つの目など一寸ばかり打出されたるを、父母抱へて、聲も惜しま  
ず悲しみあひて侍りしこそ、あはれに悲しく見侍りしか。子の悲し  
みには、猛きものも恥を忘れけりと覺えて、いとほしくことわりか  
なとぞ見侍りし。  
かく夥しく震ること、はしばしにて止みにしかども、その名残し  
ばしば絶えず、世の常に驚く程のなる二三十度ふらぬ日はなし。十  
日二十日過ぎにしかば、漸う間遠になりて、或は四五度、二三度もし  
は一日まぜ、二三日に一度など、大方その名残三月ばかりや侍りけ  
む。四大種の中に、水火風は常に害をなせど、大地に至りては異なる



文徳天徳の齊衡二年(五五)五月。奈良にある。このことは五月二十三日であったと「文徳實録」に見えてゐる。

無常住

又近勢家容微身者屋雖被不得葺垣雖壞不レ得築有樂不能レ開口而咲有哀不能高揚聲而哭進退有懼心神不安譬猶鳥雀之近鷹鷂矣。(慶波保胤「池亭記」)

變をなさず。むかし齊衡の頃かとよ、大なるふりて東大寺の佛のみぐし落ちなどして、いみじき事ども侍りけれど、猶この度には如かずとぞ。すなはち人皆あぢきなき事を述べて、いささか心のにごりも薄らぐかと思し程に、月日かさなり、年越えしかば、後は言の葉にかけていひ出づる人だになし。

六、人の世のさま

すべて世のありにくきこと、わが身と住みかとははかなく、あだなるさまかくの如し。況や、處により、身の程に隨ひて、心を惱ますこと、あげて數ふべからず。  
若しおのづから身數ならずして、權門のかたはらに居る者は深く悦ぶ事はあれども、大いに樂しむに能はず。なげきある時も、聲をあげて泣く事なし。進退やすからず、立居につけて恐れ戦く。譬へば、

雀の鷹の巢に近づけるが如し。

若し貧しくして、富める家の隣に居る者は、朝夕すばき姿を恥ぢて、諂ひつつ出で入る。妻子、僮僕、の羨めるさまを見るにも、富める家の人のないがしろなるけしきを聞くにも、心念に動きて、時として安からず。

若し狭き地に居れば、近く炎上する時、その害を遁るることなし。若し邊地にあれば、往反わづらひ多く、盜賊の難はなれ難し。

勢ある者は貪慾深く、ひとり身なる者は人に輕しめらる。財あればおそれ多く、貧しければなげき切なり。人を頼めば身他の奴となり、人をはごくめば心恩愛に使はる。世に従へば身苦し、又従はねば狂へるに似たり。何れの處を占め、いかなる業をしてか、暫しもこの身を宿し、玉ゆらも心を慰むべき。(鴨長明著「方丈記」による)

鴨長明 和歌所寄人。後、薙髮して大原山に隱遁し、風雅の中に悠遊し、數種の著述を遺した。建保四年(二八七)歿、年六十四。

弟の運動會をまちわびて  
眠りし

茶田學年  
河内正

新撰國語讀本 二昭和版 卷七終

昭和六年九月十九日印刷  
昭和六年九月二十三日發行  
昭和七年二月二日訂正印刷  
昭和七年二月六日訂正發行

新撰國語讀本昭和二版(全十冊)

定價	
卷一・二	各六拾五錢
卷三・四	各六拾貳錢
卷五・六	各五拾六錢
卷七・八	各五拾參錢
卷九・十	各五拾錢

不許複製

發行所

東京市神田區錦町一丁目  
振替貯金口座東京四九九一番

編者 佐々政一  
補修者 武島又次郎  
補修者 笹川種郎  
印發者 杉敏介

東京市神田區錦町一丁目十番地  
株式會社 明治書院  
取締役社長 三樹退三

株式會社 明治書院  
電話神田(25) 二六九五・二六九六



瀨田組後